**中古喉音韻尾を考える**

**目次**

1. はじめに　　　　　　　　　　　　　 　　　　　　　p2
2. 舌内入声字のかな表記を考える　　 p2
3. 喉内入声字のかな表記を考える　　　　　 p6
4. 上古中国語の喉音韻尾を考える p10
5. 上古喉音韻尾の中古音への変化を考える p12
6. 橋本氏の喉音韻尾のアイディアについて p15
7. 梗摂と曽摂の合流について p19
8. 外国借音にみる曽梗摂の韻尾について p22
9. 中古梗摂韻尾は口蓋化したɲだったのか p28
10. おわりに p30
11. 【注】 p31
12. 【以前の考察】 p39
13. 【引用書など】 p39
14. はじめに

　今回は前回の更新「「」の表記を考える（補訂版）」（2022.2.25）で考察を中断した「お断り」のなかの第16～20節（今回の更新では第2～7節）を考察することにしました。また今回は内容にあわせて「中古喉音韻尾を考える」に改題しました。

2022.9.13　ichhan

1. 舌内入声字のかな表記を考える

　呉音の入声字は次のようにかな表記されます（藤堂　1980：167）。

「（4）入声の韻尾も略されることがあるが，だいたいは母音の[-i][-u]を附け加えて，‘フツクチキ’のどれかに訳す。例：

塔タフ・十ジフ・節セチ・勿モチ・各カク・直ヂキなど。」

また漢音の入声字は次のようにかな表記されます注1（同書：171）。

「（4）漢語ママの入声/-p/,/-t/./-k/は，‘フ・ツ・ク・チ・キ’に訳されることは，呉音とほぼ同様である。ただし，/-k/の場合は，/-ŋ/の場合に併行して，‘キ’または‘ク’のどちらかに一定して訳される。

/o,a,ə/のあと。「各」‘カク’，「屋」‘ヲク’，「徳」‘トク’，「職」‘シヨク’（ただし職は，呉音シキ）

/e,ɛ/のあと。「昔」‘セキ’，「曆」‘レキ’

　また/t/は呉音で‘チ’に訳されることがあったが，漢音では‘ツ’に訳される。例：  
　　呉音　「質」シチ　「吉」キチ　「勿」モチ　「越」ヲチ

　　漢音　「質」シツ　「吉」キツ　「勿」ブツ　「越」ヱツ　」

ところで呉音の舌内入声と喉内入声のかきわけについては次のような違いがみられます（林　1974：163）。

「院政期以前の状態を反映するとみなされる文献において，それぞれふたつのかなのうちその一方，具体的にはチ・クに所属する字が圧倒的におおく，それに比してツ・キ所属字はきわめて少数の，かぎられたものにとどまるということである。したがって，量的には，

-t……チ

-k……ク

という関係（表記）が原則的であり，これはそのまま，

-t……i（まえより）┐

　　　　　　　　　 ├（せまい母音）

-k……u（おくより）┘

　のように理解されるのである。（略）」

そこで林氏は『九条家本法華経音』注2（平安末期～鎌倉時代の書写）の舌内入声にたいする半音字「津・智」の書きわけから次のように考えられました（同書：163）。

「　 　（標目）（所属字数）　　（所属字）　　　　　　　　　　（反切下字）

半音　津字　　　5　　　　　仏・崛・出・屈・窟　　　　　 通原注8）・出・崛・仏

　　　智字　　　92　　 　　一・結・日・弗・畢…（略）　　吉・説・薩・物…（略）

しかして既述のとおり分類の基準はあきらかで，先行母音のちがいにより，

　先行母音/u/…………………………………ツ

　それ以外（先行母音/a,i,e,o/）…………チ

のようにとらえられることは原注9），いわゆる呉音の常識的なかたちにてらしても，反切から帰納されるところからも問題のないところであろう。」

＊日本語における「反切」については注3。

そして林氏は上の半音「津・智」の所属字（5/92字）の韻目を分類して、その書きわけについて、次のような考えをだされました（同書：164）。

「ツに表記されるべき字とチに表記されるべき字がたがいにかさなりあうのは，没・術Ⅲ・物の諸韻だから，つぎにこれらの所属する声母について整理すれば，原表2（筆者注：表2 は略）のごとくである。ここに同一韻，同一声母で表記がわかれる（法華経音で，ことなった標目に属する）のは，没韻，渓母の「窟，■」兩字のみであり，それ以外は同一韻，同一声母でありながら表記がことなるくみあわせはみつからないので，かきわけの基準は“日本字音に反映した先行母音のちがい”にあるというより，ほぼ原音の声母と韻母とのくみあわせのなかに，もとめられそうにおもえる。」

＊■：「乞」偏に「」（の名）の字。「窟」（没韻渓母khuət；藤堂・小林　昭和46：60）と■は同音字（陳彭年等編　民国80：481-2）。

　このように林氏は舌内入声音のチ・ツの書きわけについて、はじめは中国語原音によっているのではないかと考えられましたが、その後次のように考えを改められました（林　1974：164）。

「第一に，（略）音声学的に理由づけることもまたむずかしいということ。第二に「窟」字と「■」字（筆者注：これらは同音字）との表記上の対立は，他の諸音義においても，つぎのようにあらわれており、

　　　　A　　　b　　 c　　 d

　窟　　津字　クツ　クツ　クツ

　■　　智字　コチ　コチ

他の諸字と並行的に，さきの先行母音との関連をみとめることの方があきらかに有利であろうと考えられるのである。」

＊a：法華経音（九条家本：平安末期ないし鎌倉時代の書写）。b：法華経単字（保延2（1136）年写）。c：東京大学国語研究室蔵法華経音義明覚三蔵流。d：金剛三昧院蔵法華経音義天福元年識語。

　そこで「以上で舌内入声音のかきわけの基準が，中国原音のわくぐみではなく，にあることが一層はっきりした（略）」（同書：165）とされました。

　そして「観智院本類聚抄」の「禾音」においても、同様の書きわけがみられる注4ところから、林氏は呉音舌内入声音のかきわけを次のように考えられました（同書：165）。

「（ⅰ）　チの表記が原則的であること

（ⅱ）　かきわけの基準は，日本字音に反映した先行母音のちがいにもとづいていること（すなわち先行母音/u/のばあいのみツの表記がとられること）

のごとき状態は，平安末期における呉音系字音のひとつのありかたをしめしているとみてさしつかえないであろう。」

　その後、林氏は法華経伝承音（呉音）のチ・ツの書きわけが時代によって変遷していることをふまえて、法華経伝承音（呉音）におけるチとツの書きわけを次の6類型にまとめられました（林　1980：62-3）。

|  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 呉音法華経伝承音におけるチとツの書きわけ | | | | | | |
|  | 表7 | 表8 | 表9 | 表10 | 表11 | 表12 |
| ①～⑧ | ⑨⑫ | ⑩⑪⑬⑯ | ⑭ | ⑮⑰～ | ～ |
| i | チ | チ | チ | チ | チ | ツ |
| e | チ・ツ | ツ |
| a | ツ | ツ |
| o | ツ |
| u | ツ |
|  | 1200年前後---------------------------------------→1600年前後 | | | | | |

＊林氏の表（上書：65）を簡略化してあります。  
＊網掛けの□はチの、□はツの、また文献⑭のみは先行母音eのときチとツの仮名表記がみられることを示します。

＊文献は九条家本法華経音（平安時代末期？）。は法華経音義（1653年刊記）。その他の法華経文献名とチ・ツの書きわけは注5。  
＊舌内入声音にたいする親鸞の書き分けは注6。  
＊安原貞室著の「かたこと」（1650年刊）の書き分けは注7。

　そこで舌内入声のチ・ツの仮名の書きわけ（変化）は次のようになるでしょう。

　　　　　　　隋以前　 ～　唐　　　　　　 宋　　　　　　　　　　　　　　現代

中国語入声：t-----------→t------------→ʔ-------------------------→φ（消失）

　　　　　 ↓（借入）　　↓（借入）　　 ↓（移入）

　　 　　 ↓　　　　　　↓　　　　　 ツ（宋音）→ツ（tu）→ツ（tsu）→ツ

　　　　　 ↓　　　　　　チ/ツ（漢音）→ツ（tu）------------→ツ（tsu）→ツ

　　　　　 ↓　　　　　　　　　↗

　　　　　 チ/ツ（呉音）----------------------------------------------→チ

日本語入声：t-----------→t-----------→ツ（促音Q）---------→t-------→Q

　　　　　　奈良　～　平安時代　　　　　鎌倉時代　　　　　　江戸初期　 現代

＊↗ 印は呉音法華経読誦音の表記の変化（チ→ツ）を示す。  
＊呉音・漢音のチとツ、また入声tは通説による。  
＊宋音（唐音）の声門閉鎖音（/ʔ/）を当時のツで受けとめたと考えてあります。前回の更新（～/japanese/japanese2hp.docx）の第8節参照。

そして呉音読誦資料で舌内入声のかな表記がチからツに変化している事実にたいして、林氏は次のように考えられました注8（林　1980：67）。

「つまるところ、舌内入声音が－ツの表記にかたむくのは、韻尾が先行母音との調和をあきらめても、なお入声音のなごりから、直前のCVの部分をきわだたせておくために、母音/u/のもつ暗音的（grave）な特徴がこのまれたからではなかろうか。  
　喉内入声音に、舌内入声音のような表記上の変化が生じなかったのは、大部分の喉内入声字において、この暗音的な/u/と、おくよりの/-k/との結合が、はやくから安定していたためであろうとおもわれる原注19。」

1. 喉内入声字のかな表記を考える

前節では舌内入声字のかな表記をみてきたので、次は喉内入声字のかな表記をみてみることにします。

そこで前節と同じように法華経音における喉内入声音の「記」（キ）と「久」（ク）の書きわけをみると、次のようになっています（林　1974：166）。

「法華経音では全174字のうち「記字」「久字」に,それぞれつぎのごとく配属される。

記字（11字）　 識　色力反　　　殖　之力反　　　力　里色反・・・（以下、略）

久字（163字）　得　等勒反　　　目　莫六反　　　薄　普各反・・・（以下、略）

先行母音との関連から，「記字」に所属する11字が，すべて/i/に先行されるものであることは問題ないところであろう。一方，「久字」のばあい，つぎのように/i/をふくめ/e/をのぞいた諸母音に先行されており，先行母音に舌内入声音のごとき明確な相補的関係がみいだせないことがわかる。」

上の標目「記・久」字と喉内入声字の先行母音との関係は次のように示せるでしょう（同書：167）。

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 標目╲先行母音 | a | i | u | e | o |
| 記　字 |  | 〇 |  |  |  |
| 久　字 | 〇 | 〇 | 〇 |  | 〇 |

そこで先に舌内入声でみたように広韻韻目によって「記・久」字の所属韻の別注9から、林氏は喉内入声の各摂の違いを次のように考えられました（同書：167）。

「喉内入声音の通・宕（江）・梗・曽各摂のうち，キに表記されるべき字とクに表記されるべき字とが，たがいにかさなりあうのは，曽摂（職韻）にかぎることは注目すべきである。」

たとえば曽摂職韻Ⅱ・Ⅲ等字のかな表記は次のようになっています注10（同書：168）。

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | | 法華経音 | 法華経単字 | 東大本 | 天福本 |
| 職韻Ⅱ | 色 | 記字 | シキ | シキ | － |
| 測 | シキ | シキ | シキ |
| 側 | 久字 | － | ソク | ソク |
| 職韻Ⅲ | 識 | 記字 | － | シキ | シキ |
| 式 | シキ | シキ | － |
| 億 | 久字 | ヲク | ヲク | ヲク |
| 極 | コク | コク | － |

＊東大本：東大国語研究室蔵「法華経音義」（明覚三蔵流）。天福本：金剛三昧院蔵「法華経音義」（天福元年識語）。

そこで喉内入声字の「・」の書きわけについて、林氏は次のように述べられています（同書：168）。

「同一韻，同一声母でありながら表記がことなる（法華経音で，ことなった標目に属する）ことはない。それゆえ，喉内入声音のかきわけの第二次的条件は，この中国字音のわくぐみにおける声母と韻母とのくみあわせのなかにもとめられそうであるが，これも舌内入声音のばあいと同様，それが音声的にきわめてなりたちにくいという理由で否定されるであろう。」

そして曽摂職韻Ⅱ・Ⅲ等字にたいして、上のような仮名の書きわけがみられることから林氏は次のように考えられました（同書：169）。

「以上で喉内入声音のかきわけの基準には，日本字音に反映した先行母音のちがいと，中国原音のわくぐみという，ふたつの条件がはたらいていることがほぼあきらかになったが，おなじ/o/を先行母音にもつ諸字は，職韻Ⅱ・Ⅲ以外にも「得・目・属…」のごとく存在するので，喉内入声音のかきわけの基準は，

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| （韻目） | （先行母音） | （表記） |
| 職韻Ⅱ・Ⅲ | /i/ | キ |
| /o/ | ク |
| それ以外 | /a/ |
| /i/ |
| /u/ |
| /o/ |

のように図示される。いいかえれば，喉内入声音は，“原則としてク，曽摂で核母音が日本字音に/i/でうつされるばあいにかぎって‘キ’の表記がとられるといえるのである。」

＊「得」：曽摂1等徳韻ək。「目」：通摂3等屋韻ɪuk。「属」：通摂3等燭韻ɪok。「得」は「徳」、「屬」は「燭」と同韻（民国80　陳彭年等：529,461）。ローマ字は藤堂・小林　昭和46：108,26,29より。

　上の先行母音がiのみ「キ」で表記されるという曽摂職韻2・3等（「・」など）の特殊性について林氏は次のように述べられています（林　1974：169）。

「かきわけの条件のひとつが，原音の体系をかりて説明されざるをえない以上，原音とかな表記との対応は，同時に原音のがわからもまた積極的に支持される必要があるであろう。これは河野六郎氏の御指摘によれば，つぎのように解釈される。すなわち，中国中古喉内韻尾では，従来の-ng～-kに対し，palatalの-ng′～-k′をみとめるたちばが有力であり，その各韻摂との対応は

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 内外＼韻尾 | -ng～-k | -ng′～-k′ |
| 外転 | 宕（江） | 梗 |
| 内転 | 通 | 曽 |

のごとくである原注16）。日本字音における喉内入声音のかな表記で，曽摂にかぎり核母音/i/の影響でキの表記がとられるのは，この事情を反映するものとかんがえられる。同じ条件にある梗摂には，核母音を/i/でうつすばあいがないのでこの際問題にならない。」

＊中古音の喉内韻尾に上の2種（ng～kとng′～k′）を考えることについては、次節以下参照。  
＊上の原注16（「河野六郎『朝鮮漢字音の研究』p.132～134（朝鮮学報33）」）については注11。

そして喉内入声の書きわけの例を林氏は次のようにあげられています（林　1974：168,171,171,172）。

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
| 語尾の  母音 | 法華経音 （記・久字） | 石山寺蔵大般若経字抄（同音字注） | 大般若経音義（天理図書館蔵本） | 西大寺金光明最勝王經 |
| キ | 測・色（職韻Ⅱ） | 掲出字・注音字はみられず | 勅　智与久（天理図書館蔵本） | （86-10） |
| ク | 側・即（職韻Ⅲ） | 抑　音億（抑＝職韻Ⅲ，億＝職韻Ⅲ）  郁　音育（郁＝屋韻Ⅲ，育＝屋Ⅳ）  畜　竹　菊音…（畜＝屋韻Ⅲ，竹＝屋韻Ⅲ，菊＝屋韻Ⅲ） | 郁　意久　褥　耳久（無窮会蔵本）　郁　以久　索　四久（薬師寺蔵本）  測　色（天理図書館蔵本・薬師寺蔵本蔵本） | 養  （9-1）・災（55-16） |
| 沃　屋（沃＝沃韻Ⅰ，屋＝屋韻Ⅲ） |

このように九条家本法華経音にみられる半音「記・久」字による喉内入声の書きわけは石山寺蔵大般若経音義の同音字注にもみられます。  
　そこで林氏は次のように述べられています注12（同書：172）。

「結論は，あらかじめ予測されえた，きわめて常識的なところにおさまることになるが，結局，曽摂-k′の口蓋性は，原音の核母音のこまかなちがいはすてさられても，その前舌性を日本字音が/i/にうけとめた，その時点で，前舌性との関連において，すでにはっきりと日本字音のなかにとりいれられ，おそらくは同時に寄生母音をともなって，あきらかにそれ以外のものとの音韻論的な区別をたもちながら，かな表記への固定へとつながっていったものとかんがえられる。つまるところ，喉内入声音は，その受容と伝承の過程を通じ，おおきな問題なく以後のかな表記に移行しうる，そうしたかたちを，入声としての短促性のなかに持しえていたことになるわけである原注20）。」

そして林氏は法華経・大般若経などの諸音義における喉内・舌内入声のかな表記について、次のようにまとめられています（同書：173）。

「（ⅴ）喉内入声音のばあい，かきわけの基準にはふたつの条件がある。

（1）日本字音にうつされた先行母音……/i/

（2）中国原音の体系……曽（梗）摂

（ⅵ）喉内入声音におけるpalatal -k′の維持については，かな表記の固定以前の伝承過程を通じて説明されうるみとおしがたつ。

（ⅶ）舌内入声音のばあいには，その表記の変遷に問題がある。

　　　チ→ツ」  
＊省略した（ⅰ）～（ⅳ）は注13。

　ここまでの林氏の考察によって喉内入声字のかなの書きわけは中国語原音（林氏によれば、その一部の曽摂）と関係していることがわかりました。

　次節では上古中国語の喉音韻尾を考えていくことにします。

1. 上古中国語の喉音韻尾を考える

前節では喉内入声字がクではなくキのかな表記が一部みられることにたいして、河野氏の中古喉音韻尾にng,kとpalatalのng′,k′の2種を考えられたアイディアを紹介しました。

そこでこの中古喉内韻尾が2種であるとのアイディアについて考えるために、上古中国語注14の董同龢氏の22部の部分けを次にみることにします（頼　1989：155）。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
|  | 鼻音韻尾 | 上古の部 |
| Ⅰ類 | 喉音韻尾g,k,ŋ | 侯・東,　幽・中,　宵 |
| Ⅱ類 | 魚・陽,　之・蒸,　佳・耕 |
| Ⅲ類 | 舌音韻尾d,t,n | 祭・元,　微・文,　脂・眞 |
| Ⅳ類 | 韻尾ゼロ | 歌 |
| Ⅴ類 | 唇音韻尾b,p,m | 葉・談,　緝・侵 |

上の表から喉音韻尾類（Ⅰ・Ⅱ類）は他の舌音・唇音韻尾類（Ⅲ・Ⅴ類）に比べて部が多いことがわかります。

そこで上の22部の中古韻書における配列をみると、次のようになっています（同書：143）。

「ところで，切韻系の韻書は韻を配列するのに，韻尾の同じものをまとめるようにしているが、Ⅰ類の投影は原則として韻書の先頭にあり，Ⅱ類の投影は原則としてそれと離れて中間にある（原注24）。」

＊「投影」：「便宜上，上古の音韻Xが中古の音韻Aに變化したとき，「AはXの投影である」というように表現することとする。」（同書：140）。

　そして陽類について頼氏は次のようにみられました（同書：156)。

「また陽類について，Ⅰ類は原則として韻書の先頭にある韻(東冬鍾江)であるのに對し,Ⅱ類は原則として韻書の中間にある韻(陽唐庚耕淸靑蒸登)である。また古いタイ漢字借音ではⅠ類（幽部の「丑卯酉」）とⅡ類（之部の「子巳亥」とでは韻が違う。またⅠ類はⅤ類(唇音韻尾の部)と關係が深いが，Ⅱ類はむしろⅢ類(舌音韻尾の部)と關係が深い。」  
  
　そこで頼氏は喉音韻尾Ⅰ類とⅡ類には概略、次のような違いがあると考えられました注15（同書：156）。

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 陽類（鼻音韻尾） | | 陰類 | 各類との関係 |
| 主母音 | 韻書の韻目 | 母音/ゼロ |
| Ⅰ類 | 前よりの母音は現われない | 先頭にある韻（東冬鍾江） | 殆どu | Ⅴ類と関係が深い |
| Ⅱ類 | 各種の母音が現われる | 中間にある韻（陽唐庚耕作淸靑蒸登） | 主としてi | Ⅲ類と関係が深い |

そして上の違いから、従来ŋ（＝ng）と考えられていた喉音韻尾は次のように2類に分かれると、頼氏は考えられました（同書：146）。

Ⅰ類：-ɡw,-kw,-ŋw　唇音化された軟口蓋音注16

Ⅱ類：-ɡ,-k,-ŋ　　 軟口蓋音

　または

Ⅰ類：-ɢ,-q,-ɴ　　口蓋垂音

Ⅱ類：-ɡ,-k,-ŋ　　軟口蓋音　（略）

いまこの2説について，どちらか一方に決定することを避け，Ⅰ類を假に-ɢw,-qw,-ɴwと記すこととする。」

＊Ⅰ・Ⅱ類の左項は陰韻、中項は入類、右項は陽類。

　そして頼氏はⅠ類の喉音韻尾について「ともかくも將来決定されるまでは，Ⅰ類の韻尾を-ɢw,-qw,-ɴwと記しておき，その實體は-ɡw,-kw,-ŋwかまたは-ɢ，-q,-ɴなのだと約束しておくより他ない（原注41）」(同書：150)とされました注17。

　その後、ベトナム語の方言に/ɔŋ/と/ɔŋm/の対立がみられる注18ことをうけて、頼氏はⅠ類の喉音韻尾を次のように修正されました注19（同書：158-9）。

「そこで主母音から韻尾に移るところにṷを考えて，Ⅰ類の韻尾-ṷɢ,-ṷq,-ṷɴとすべきであった。（略）そしてこのuは主母音ではなく，むしろ韻尾に屬するものであるから，これを渡り音と考えṷと記した方が適當であろう。以上によってⅠ類の韻尾は（所謂る合口的な喉音韻尾）は-ṷɢ,-ṷq,-ṷɴであると推定し原注（5），前論の所説（-ɡw,-kw,-ŋw または-ɢ,-q,-ɴ）はこの點を訂正する（原補1）。（略）のみならず，上古ではすべての韻尾子音の前に，その子音の性格によって決まる獨特の渡り音があったとも考えられる（原注6）。とすると，Ⅰ類のṷは，韻尾子音が口蓋垂音であることを示す渡り音であるといえる。從ってこのṷに～ɡ,～k,～ŋを續けることは上古の場合，避けたほうが適當であろう。」

＊下線は筆者。この「獨特の渡り音」については尾崎氏の考え（注35）参照。

　そこで前説と上の修正説の違いは次のようになるでしょう(同書：146,158)。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
|  | | 前説 | 修正説 |
| Ⅰ類 | 唇音化された軟口蓋音 | -ɡw,-kw,-ŋw | -ṷɢ,-ṷq,-ṷɴ |
| 口蓋垂音 | -ɢ,-q,-ɴ |
| Ⅱ類 | 軟口蓋音 | -ɡ,-k,-ŋ | |

ところで頼氏の前説にたいして、平山氏は「あとがき」（平山　1989：505)のなかで、次のようにまとめられています注20。

「上古音の“部”のうち，喉音韻尾-g,-k,-ŋをもつと從來推定されてきた部は，唇音韻尾・舌音韻尾をもつとそれぞれ推定される部に比べて數が多く，そのため喉音韻尾をもつ部だけのために，餘分な主母音を設定せざるをえなかった。そして餘分に設定された主母音はいずれもo,uなどの圓唇母音である。この狀況に，通常の喉音韻尾系列の他に，唇を使う喉音韻尾の一系列を想定し,それを暫定的に-ɢw,-qw,-ɴwと表記する。通常の喉音韻尾をもつのは魚・陽，之・蒸，佳・耕の諸部であり，唇を使う喉音韻尾をもつのは侯・東，幽・中（冬），宵の諸部である。この假説により，從來主母音の圓唇性によって説明されてきた音韻史上の諸事象は韻尾の圓唇性によって説明されるので，主母音としては他の韻尾をもつ諸部に平行して非圓唇母音だけを立てればよく，音韻體系を解釋する上で非常に好ましい結果が得られる。それだけでなく，とくに陰類の侯・幽・宵諸部に屬する韻母の中古音への變化をより自然に説明することができる。合口的喉音韻尾の骨子は一應このように要約できるであろう。」

1. 上古喉音韻尾の中古音への変化を考える

　前節では上古中国語の喉音韻尾を2種とみる頼氏の考えをみましたが、上古の鼻音韻尾は次のように推定されています（頼　1989：223）。

「上古の鼻音韻尾は，從来-m,-n,-ŋの3種が推定されていた。即ち，上古の侵・談部が-mであり，眞・文・元部が-nであり，中・東・耕・蒸・陽部が-ŋであるというのである。（略）」

　そのなかで唇音韻尾mは次のように変化しています（詹　昭和58：46）。

「中古期の漢語には三種類の鼻音韻尾韻，-m（咸，深摂）,-n（山，臻摂）,-ŋ（宕，江，曾，梗，通摂）があった。（略）広大な北方方言区と呉，湘，贛方言などでは，-m韻はすでに失なわれて-n韻に合併しており，粤，客家，および閩方言区の一部（閩南）のみが，系統的に-m韻を保存している。」

　そこで現代の北京方言と広州方言の鼻音韻尾をくらべると次のようになります（頼　1989：222）。

「現代の北京方言には，鼻音韻尾として-nと-ŋがある。

〔例〕　-n：但天根因南漸金深；- ŋ：東用當相孟爭命精登興

ところが，北京方言（以下「北」と略稱）の語尾-nの文字は，現代の廣東（廣州）方言（以下「南」と略稱）では韻尾-nと-mとに分かれる。そこで北京-nの文字を二分して，（a）｛北n, 廣n｝のグループと，（b）｛北n, 廣m｝のグループとに分けることができる。（略）」

そして北京方言と広州方言の鼻音韻尾を比較すると、次のようになります注21（同書：222）。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
|  | -m | -n |
| 広州方言 | 南漸金深 | 但天根因 |
| 北京方言 | － | 南漸金深但天根因 |

また頼氏は中国語各方言と外国借音にみえる喉音韻尾を次のようにまとめられています（頼　1989：149,222）。

|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 上古の喉音韻尾（頼説） | | | | Ⅰ類（ɴw：東中(宵)部） | Ⅱ類（ŋ：耕蒸陽部） | | | | |
| 中古の喉音韻尾 | | | | 通摂 | 宕摂 | | 曾摂 | | 梗摂 |
| 東A冬東B鍾江韻 | 唐陽韻 | | 登蒸韻 | | 庚A耕庚B淸靑韻 |
| 北方 方言 | 西南官話 | 陽韻尾 | -ŋ | | | -n | | | |
| 北京方言（下注） | 入尾韻 | （-u）＊ | | | （-i）＊ | | | |
| 客家方言 | | 陽韻尾 | -ŋ | | | -n | | | |
| 入尾韻 | -k | | | -t | | | |
| 外国  借音 | 新漢音 | 陽韻尾 | -ウ | | | （-イ） | | | |
| 入尾韻 | -ク | | | （-キ） | | | |
| ベトナム 漢字音 | 陽韻尾 | -ŋ | | | | | -ȵ | |
| 入尾韻 | -k | | | | | -ȶ | |
| 漢音（舊） | 陽韻尾 | -ウ | | | | | -ウ（2等）/-イ（3,4等） | |
| 入尾韻 | -ク | | | | | -ク（2等）/-キ（3,4等） | |
| 呉方言 | 陽韻尾 | -ŋ | | | | | -i（2等） | |
| -ŋ（3,4等） | |

＊「第4表　喉音韻尾表」の注記と西安方言や温州方言（呉方言）などは省略して、作表。

＊ベトナム漢字音：「中古舌音韻尾は-ɳ.-ʈとなる。」（同書：149）。

＊日本漢音（梗摂）の例：「」（敬韻2等）。「」（敬韻3等）。「」（勁韻4等）。

　そこで北京方言と西南方言の鼻音韻尾ŋとnの違いから、頼氏は次のように考えられました注22（同書：223）。

「もしも現代（筆者補：北京方言と西南方言）における｛ŋ：ŋ｝，｛ŋ：n｝の現象が，中古における韻尾の區別に由來するとすれば，中古の鼻音韻尾には-m,-nの他に，｛ŋ：ŋ｝の祖形と｛ŋ：n｝の祖形という2形が加わり，合計4種の鼻音韻尾があったことになる。とすれば上古の韻尾の推定にも，中古に4種の鼻音韻尾があることを出發點とすべきであろう。（略）」

そして頼氏は喉音韻尾の上古Ⅰ類（ɴw）とⅡ類（ŋ）との関係を中古にもおよぼし次のように考えられました（同書：225）。

「思うに上古の｛ɴw：ŋ｝は，調音位置の前移という一般的傾向に從って，中古（少くとも中古末）には，｛ŋ：｝という形に變ったのであろうと思われる。（略）」

＊下線は筆者。次節の橋本氏の異化作用参照。

　しかし上古から中古への変化をɴw→ŋ（Ⅰ類）とŋ→（Ⅱ類）と考えると、「例えば耕部の變化を上古以來たどってみると，上古-ŋ＞中古-＞現代（北京）-ŋとなって，變化が行きつ戾りつすることである（蒸陽部にも同様のことがある）」（上書：226）ことになります。そこでそのような変化にたいして、頼氏は「ジグザグの変化こそ，眞の變化であると思われる。」（同書：227）として考察をおえられました。そして、その後橋本氏が異化作用という新たなアイディアによって不明であった中古の実体を特定されることとなったのですが、その橋本氏の考えは次節で紹介することにします。

1. 橋本氏の喉音韻尾のアイディアについて

　まず橋本氏の小論の目的が述べられている次の言葉を紹介しておきます（橋本　1974：56）。

「（略）中古中国語に何故2種類の高口蓋韻尾（口蓋化された変種と口蓋化されない変種）が再構されなければならないか――を，特に朝鮮漢字音との関連において論じてみたいと思う。」

＊高口蓋音については注23。

そこで朝鮮漢字音の蟹・梗摂をみると、次のようにɐが現われます（同書：58）。

|  |  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 内外∖摂 | 果 | 蟹 | 効 | 咸 | 山 | 宕 | 梗 |
| 外 | 家ka | 解kɐi | 敲ko | 監kam | 姦kan | 江kaŋ | 羹kɐiŋ |
| 茄ka | 猘kjəi | 嬌kjo | 検kəm | 蹇kən | 薑kaŋ | 京kjəŋ |
| 内外∖摂 | 遇 | 止 | 流 | 深 | 瑧 | 曽 | 通 |
| 内 | 孤ko | － | 鉤ku | － | 懇kɐn | 恒kɐŋ | 公koŋ |
| 句ku | 奇kɯi | 九ku | 金kɯm | 僅kɯn | 兢kɯŋ | 弓kuŋ |

＊「解」（上声蟹韻）・「羹」（平声庚韻）：「ᄀᆡ」/「ᄀᆡᆼ」（河野　1968：資料音韻

表Ⅱ107,Ⅰ50）。

　ところで朝鮮漢字音において、蟹摂と梗摂に同じɐが現われることにたいして、橋本氏は次のように考えられました（同書：57-8）。

「表中（筆者注：上表），外転系の摂で先ず気付く事は，Ⅰ，Ⅱ等の主母音が一般に“a”によって示されているのに（効摂の“o”は“a”＋“u”より来たと解釈する），蟹摂と梗摂のみ“ɐ”で示されている事である。（略）所与の音節の中に母音を表す“i”が含まれていれば“a”のかわりに“ɐ”が現れるという規則性が看取れるからである。（略）つまり，蟹摂の韻尾がほぼ疑いなく＊iであるからには，梗摂の末音もそれと何か音声学的，音韻論的性格を共通にする音声であったのではないかと考えられて来るからである。（略）」

　そこで橋本氏は18世紀にはじまった果（假）・江摂2等韻の口蓋化注24と、同じ2等韻でも口蓋化しない蟹・梗摂との違いを次のように例示されています（同書：58）。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
|  | 2等韻 | 中古中国語 | 現代中国語 |
| 假摂 | 「家」（平声麻韻開口見母kă） | ＊ka | chia/gia/[tʃia] |
| 江摂 | 「江」（平声江韻開合見母kɔŋ） | ＊kaŋ | chiang/giaŋ/[tʃiaŋ] |
| 蟹摂 | 「楷」（上声駭韻開口渓母khʌi） | ＊kai | k‘ai/kai/[k‘ai] |
| 梗摂 | 「耿」（上声耿韻開口見母kʌŋ） | ＊kiaɲ | kêng/gəŋ/[kəŋ] |

＊（　）内は藤堂・小林　昭和46：-,30,50,94。「家」は「古牙切」（陳彭年等編　民国80：166）。

＊中古梗摂喉音韻尾は通説ではŋ。＊kiaɲについては次項。

　そして橋本氏は次のように考えられました（同書：58）。

「（略）蟹摂も梗摂も口蓋化を持つ末音があったために（つまり蟹摂の韻尾が＊iなら，梗摂の末尾音は口蓋化高口蓋音――所謂舌面音――なる＊ɲ――入声を持つ場合には＊ɲに相当する閉鎖音＊c――であったために），それらの末尾音の異化作用によって頭子音の口蓋化が妨げられたか，もしくは口蓋化が一度はおこなわれてもその＊i介音が早くから失われたのではないかと考えられる。介音と末音との間の異化作用に由来する或る種のphonotacticな不規則性は，現代方言に広く見られる事象である原注13）。」

＊上の原注13については注25。

　そこで「現代の中国語が中古中国語の軟口蓋鼻音韻尾をほぼ完全に保存しているのに，梗摂に対応するものだけはnを持つ例が度々みられるという事実」（橋本　1974：59）にたいして、橋本氏は次のように考えられました（同書：59）。

「曽摂の末音が＊ŋであったのに，中古中国語における梗摂の末音は＊ɲであったために，前者に対応する現代中国語音が大部分ŋであるのに反して，後者に対応するものは多くnとなっているのではないかと考えられるのである。他の条件が同じであったとしたら,＊ŋ＞nの変化よりは＊ɲ＞nの変化の方が，起こる可能性がずっと大きいと考えられるからである。中期朝鮮語漢字音の例えば“kɐiŋ”のような転写の“i”と“ŋ”は，舌面鼻音を音節末に持たなかった中期鮮語の話手がこの＊ɲを写そうとして随分苦心した結果になるものと考えられる。」

＊「冰」（「氷」の異体字）は曽摂蒸韻pɪŋ（藤堂・小林　昭和46：108）。「勁」は梗摂勁韻kieŋ（同書：90）。現代中国語ではそれぞれbīng/jìn,jìng（愛知大学中日大辞典編纂処編　1968：108,733）。

＊下線は筆者。

　そして梗摂3等韻が現代中国語において非口蓋化の変種を持っていることから、橋本氏は次のような異化作用を考えられました（同書：59-60）。

「梗摂Ⅲ等韻（つまり介音に＊iをもっていた音節）が現代中国語において次に示すような非口蓋化の変種を持っている事実である：

漢字　中古中国語　現代中国語

勁　　＊kiaɲ　 　　ching/giəŋ/[tʃiŋ]

　　　　　　　　　kêng/gəŋ/[kəŋ]（原注16）

傾　　khüɛɲ　　　 ch‘ing/kiəŋ/[tʃhiŋ]  
　　　　　 　　　k‘êng/kəŋ/[khəŋ]

つまり，このような非口蓋化の変種が出来たのは介音の＊i又は＊üと末音の＊ɲの異化作用によるものと考えられるわけである。（略）」

　上の橋本氏の考えを花登氏は次のようにまとめられています注26（花登　1974：2-3）。

「（上略）しかし，中古中国語に二種の喉音韻尾のあったことを，中古中国語の音韻体系そのものの内的証拠（internal evidence）により立証されたのは，橋本萬太郎氏であった。橋本1970では，まず，中国音韻史上で異化作用（dissimilation）の果した役割が大きなものであったことを述べる。つまり，中国語にaやaの如き構造の韻母が存在し難いのは，異化作用によるものである。一方，現代中国の北方方言では，開口二等の牙喉音は口蓋化を起こしている。例えば，假摂「家」は中古音価＊kaであるが，現代北京音では〔tɕia〕と発音（筆者注：口蓋化）される。ところが，蟹摂と梗摂の開口二等牙喉音には口蓋化しないものがある。このことの解釈に橋本氏は異化作用という概念を導入された。つまり，橋本氏は韻尾-iを有することを特徴とした蟹摂は，介母-iを派生すること（つまり口蓋化）を韻尾-iの異化作用により妨げられたため口蓋化しないものがあった，と解釈されたのである。また，梗摂の場合には，介母-i-の派生を妨げたものとして，palatalな喉音韻尾原注⑧（-ɲ）を設定された。（次項に続く）」

＊上の原注⑧については注27。

　そして花登氏は自身の考えとして次のように述べられています（同書：3）。

「（上引につづいて）橋本氏が異化作用という概念を導入されたことにより，始めてここに二種の喉音韻尾の存在し得たことが音声学的に証明されることとなった。（略）  
　　三　**palatalな喉音韻尾**既述の如く橋本氏が，開口二等牙喉音が一般に北方中国語の中で口蓋化する（palatalize）という傾向の中で，梗摂のみ（陽音韻の中では）がそれに従わない理由を，梗摂のもっていた口蓋化した（palatalな）韻尾の異化作用に求められたのは卓見であった。ところで，頼氏は上古中国語からの類推によりpalatalな喉音韻尾を梗摂ばかりでなく曽摂にも認められた。この相違を我々は如何に解釈し得るであろうか。」

　ところで橋本氏は上の異化作用について中期朝鮮語の『龍飛御天歌』22章を引用して、次のように述べられています（橋本　1974：60）。

「黒龍ʔihɐnsalaicukə　白龍ʔɐlsalʔalaisini　子孫之慶ヲʔɐl　神物ʔisɐlfɐni（筆者注：「龍歌古語箋」（前田　昭和49：78）より再引）（改行）に見える「慶　ʔɐl」なる助詞の使い方が例外をなす。すなわち「慶」（筆者注：「경」kyaŋ）を“kjəŋ”と発音する限り，“ʔɐl”の“ɐ”は例外と認めざるを得ないのである。しかし乍ら，これも「慶」を“kaŋ”と読めば“ʔɐl”は（筆者補：ともに陽母音系列なので）例外ではなくなる（中略）朝鮮の伝統的な字書には「福」の意を表わす場合丈この「慶」の字は“kaŋ”と発音されるとある原注19)。「慶」の中古中国語音を我々の再構にしたがって、 ＊kiaɲとすれば，この“kaŋ”なる発音も，介音の＊iと舌面末音の＊ɲとの異化作用によって出来たものと看做されて，少しも不可思議なものではなくなる。」

＊橋本氏の翻字ɐ（ᄋᆞ）/ə（어）は福井氏の転写では「ʌ/e」（福井　2013：11）。

＊陽母音系列（母音調和）については注28。

＊「慶」（梗摂3等敬韻渓母）：「khɪɛŋ」（藤堂・小林　昭和46：90）/「경　慶」（河野　1968：音韻表Ⅰ-63）。

＊中古の見母・渓母（ㄱk-/ㅋkh-）が朝鮮漢字音でㄱ（k-）として現れることについては注29。

　このように頼氏が疑念のままに残された中古喉音韻尾の実体を橋本氏は異化作用という概念を用いて有声硬口蓋鼻音（/ɲ/）と結論づけられました。

　そこで中古梗摂喉音韻尾がɲであったと考えると、中国語西南方言・北京方言注30の喉音韻尾は次のように変化したと考えることができるでしょう。

　　　　　　　　 上古　中古　　中世　　　　現代

咸・深摂　　　　　：m------------┐　　　　　消失（南方方言のmは存続）

山・臻摂　　　　　：n------------┴--------→n

梗・曽摂（Ⅱ類）　：ŋ---→ɲ（＝）┬--┬---→n（西南方言）

　　　　　　　　　　　　　　　　　　│　└---→ŋ（北京方言）

　　　　　　　　　　　　　　　　　　└-------→ɲ（ベトナム語）

　通・江・宕（Ⅰ類）：ɴw--→ŋ----------------→ŋ（頼説）

＊上では橋本説によって中古（頼説）をɲとみてあります  
＊筆者の考えは第9節に。

1. 梗摂と曽摂の合流について

　前節では橋本氏のアイディア（異化作用）によって西南方言の梗摂喉音韻尾の変化をうまく説明できることをみました。  
　ところで「中古音の音韻体系は，唐代に入ると次第に変化をはじめ，唐代中期にはかなりの変貌をとげるに至」（平山　昭和42：158）っています。  
　平山氏は『慧林音義』（787-807年、慧林撰述）にみられる韻の合流を次のように述べられています（同書：159）。

1)　1等重韻の合流。（略）東一・冬（通摂），咍・灰・泰（蟹摂），覃・談（咸摂）（略）。

2)　2等重韻の合流。（略）皆・夬・佳（蟹摂），山・刪（山摂），庚二・耕（梗摂），咸・銜（咸摂）（略）。

3)　直音4等韻の拗音化。（略）例えば，先韻en＞仙韻iɛn（山摂）。したがって唇・牙喉音声母の下では重紐A類に合流した。

4)　C類韻母のB類韻母への合流。（略）例えば，欣韻ɪn＞真韻ɪĕn（臻摂），元韻ɪʌn＞仙韻ɪɛn（山摂）。同摂内にB類韻母がないときはそのまま残った。陽韻ɪɑŋ（宕摂），東三韻ɪuŋ（通摂）などがそれである。（略）。

5)　止摂諸韻の合流。止摂支・脂・之の3韻は合流した。4）項により微韻もこれらに合流したので，結局，止摂諸韻は（開・合の点をのぞき）一つになってしまったのである。」

　ところで東一韻（中古uŋ）と冬韻（中古oŋ）は同じ通摂内の韻同士で起った合流ですが、曽摂と梗摂においては韻摂の枠を越えてのめずらしい合流が起っています。  
　そこで佐藤氏の梗曽両摂の合流の時期やその過程についての考えを次にみてみます（佐藤　昭和48：67-8）。

「（上略）いま、上述の各種資料に示された状況を比較し総合すると、ほぼ次の如き一つの共通の事実が浮び上ってくる。即ち、唐代においても中古音同様曽摂と梗摂は区別されていた。しかし、それは-ng韻尾を有する平上去声においてであり、-k韻尾を有する入声では確かにその区分は崩壊し始め、中晩唐期にはおよそ合流していたか、或いは少くともその進行中の段階にあった、ということである。従って、入声に関する限り、曽梗合流の時期は十分唐代まで遡り得るというわけである。（略）切韻時代には、本稿冒頭でも少しく言及したように、この（筆者補：梗摂と曽摂の）両類は性格の全く相反する主母音を有して相対峙していた。諸般の事情から前者は前舌的なa類の主母音を、後者は中舌的なə類の主母音をその弁別要素として有していたと推定される原注。中古音ではこの他に後舌的な主母音ɑ（或いはɒ？）を有する宕摂なる一類があって梗摂・曽摂とは鼎立の関係にあった。宕摂梗摂は上古音時代にはある程度の親密な間柄にあったようであるが、切韻以後は梗摂はむしろ曽摂に接近し合流した。さてその場合、梗摂は主母音において当然a＞əの変化を辿ったと考えねばならない。（略）筆者の考えによればその変化過程は次の如くである。

　梗摂　中古音ang＞aing＞ɐing＞（曽摂と合流して）əng

1. まず最初の段階で主母音と韻尾の間にon-glideとして拗音iが生じ韻尾の口蓋化を引き起した。（b）次に主母音の質的或いは量的弱化が進み、主母音は前舌的なaから中舌的なɐに転じた。そして、（c）恐らくはその主母音相互間の音声的近似性により梗摂は曽摂əngと合流した。以上によって、梗摂の主母音əは曽摂に合流した結果だと言い得る。」

＊上述の各種資料のうち唐詩・敦煌変文については注31。

　そこで「入声の側から始ってその後平上去声に及んでいったと推測される」（佐藤　昭和48：68）ところの曽摂と梗摂の珍しい合流について、佐藤氏は次のように考えられました（同書：70）。

「（略）中晩唐期において両摂は平上去声でəng・ɐingと明確な対立を示していたと考えられるのに対し、入声ではこれと平行したək・ɐikの状態では既になく、恐らくその差は音声学的にも極めて近似した音形を有したのではなかったかと推測される。（略）」

　さて先のa,b,cの変化にたいして、佐藤氏は次のように考えられました（同書：70-1）。

「まず（a）韻尾の口蓋化について。（略）即ち、前舌的な母音aを主母音としその直後に-ng・-kといった軟口蓋子音韻尾を有する韻母では、恐らくその主母音の前舌性および韻尾の後舌性のゆえにその中間に寄生的なわたり音iを出し、そして韻尾の-ng・ -kを口蓋化することになったものと思われる。例えば、

　更　中古音kang（映韻二等）＞kaing＞kɐing＞kəng（北京語）

　虻　中古音mang（庚韻二等）＞maing＞mɐing＞məng（北京語）（略）

（b）主母音a＞ɐの変化について。（略）即ち、前述の如く、主母音と韻尾の間に口蓋音的on-glideを発達させ、その結果新たに-ing～-ikなる一種の複合韻尾の系列を成立させた。これらは元の-ng・-kの韻尾の形に更にiの要素が加わったものであり、従ってそうした関係上韻尾は相対的に重くなり、主母音は逆に軽くなる（筆者注：主母音と韻尾は弱・短と強・長の関係）。とすれば、そのような韻尾に先行しうる母音の性格としては当然aの如き明確な発音の母音ではありえず、恐らくはそれの変容したものでɐの如き短・弱の性質の母音が現れるに違いない。（略）」  
　＊主母音と韻尾（内外転と強弱あるいは長短）との関係については注32。

　上の考えを佐藤氏は次のように示されています（同書：72）。

　曽摂入声：ək＞ək＞əʔ  
　梗摂入声：ak＞aik＞ɐik＞ɐik＞（曽摂と合流して）ək＞əʔ  
　　＊k（上付きのk）：入声の弱化を示す佐藤氏の記号。

＊入声弱化については「入聲韻尾消失の過程」（有坂　昭和32：601-7）。

　そして佐藤氏は曽梗摂入声の合流にたいして次のように考えられました（同書：72-3）。

「換言すれば、両者（筆者注：曽摂と梗摂)は主母音ə・ɐによってというよりは実際上韻尾-k・-ikによって区別されていたのだと言い得る。とすれば、主母音ə・ɐの対立を二つの別々の母音音素の対立と見る必要は必ずしもなくなり、これらを音韻的に一個の/ə/に統一することは無理ではないと思われる。一体このɐは歴史的には中古のaから来たものであるが、（略）（əは中古音以来一貫してəのままである）。即ち、ɐは特別な韻尾-ing～-ikとしか結合しなかったのに対し、əはそれ以外の各種の韻尾と結合し得た。つまり、ɐ・əは韻尾に関して互いに補い合う分布を示していたのである。かくてɐをəの一種のallophoneとし、そしてɐing～ɐikを韻尾のpalatalな性格による/əing/～/əik/の実現と見ることは十分に可能であろう。（中略）従って、当時の入声の子音韻尾は、確かに韻母を構成する一要素ではあるが、主母音に比べればあまり目立たない存在になっていたと思われる。（略）恐らく先に見たə・ɐの対立と同様、この弱化韻尾としての-k・-ikの対立も事実上殆んど目立たないで容易に混同され、終にはどちらか一方に（多分-kに）統一されることになったのであろう。かくして、曽摂入声ək（/ək/）及び梗摂入声ɐik（/əik/）は主母音においても韻尾においても殆んど区別され得ない状態になって、結局梗摂→曽摂の方向で吸収併合が行われたものと考えられる。」

　また佐藤氏は梗曽摂入声の合流にたいして、入声韻尾の弱化との関係を次のようにみられました（同書：74）。

「（略）唐代における入声韻尾の弱化は単に韻尾子音の発音上の軟弱化、希薄化を意味するだけにとどまらず、入声韻尾の単純化（最終的には-ʔ化）を促進させた源流としても考えられるのではないか、ということである。即ち、入声韻尾の併合はまず唐代において-kと-ikの間で、次いで宋代に入って-kと-tの間で行われ（この段階で韻尾-ʔが成立原注）、最後に-pが脱落して-ʔに帰すという過程が取られたわけであるが、ここで明らかなように、入声韻尾は大体調音部位の相近いものから遠いものへと順に併合していったもののようである。その意味で唐代における-k・-ikの合流はその後の韻尾単純化現象の前駆となるものとして注目されるのである。」

＊佐藤氏の原注については注33。

　ここまでみてきた曽梗摂（入声）の合流にたいする佐藤氏の考えは次のように示せるでしょう（同書：72-3）。

|  |
| --- |
| 中古　　　　　　　　　　　中晩唐期　　　現代 |
| 曽摂入声：Cək---→Cək-------------------┬-------→Cəʔ  梗摂入声：Cak---→Caik→Cɐik→Cɐik→Cək--┘ |

＊声門閉鎖音（/ʔ/）を表記するため、とりあえず声母はCとしてあります。

1. 外国借音にみる曽梗摂の韻尾について

　前節では曽梗摂の入声の合流についての佐藤氏の考えをみたのですが、そこには中古曽摂の登・蒸韻（入声は徳・職韻）の主母音の問題がかかわっています。

　まず曽梗摂の韻母の違いを次にみてみます（花登　1974：4）。

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
| 韻摂 | 韻目 | 開口 | 合口 | 開口（合口はのぞく） |
| 曽 | 登（徳） | əŋ/ək | uəŋ/uək | 1等登韻əŋ/徳韻ək |
| 蒸（職） | ieŋ（唇音及び正歯二等）/iek | iuek | 2等蒸韻ïĕŋ/職韻ïĕk 3等蒸韻ɪĕŋ/職韻ɪĕk 4等蒸韻iĕŋ/職韻iĕk |
| iəŋ（上記以外）/iək |
| 梗 | 庚二（陌） | ɐŋ/ɐk | uɐŋ/uɐk | 2等庚韻ɛŋ/3等陌韻ɛk |
| 耕（麦） | äŋ/äk | uäŋ/uäk | 2等耕韻ʌŋ/麦韻ʌk |
| 庚三（陌） | iɐŋ/iɐk | iuɐŋ/iuɐk | 3等庚韻ɪɛŋ/陌韻ɪɛk |
| 清（昔） | iäŋ/iäk | iuäŋ/iuäk | 3等清韻ɪeŋ/昔韻ɪek |
| 4等清韻ieŋ/昔韻iek |
| 青（錫） | eŋ/ek | ueŋ/uek | 4等青韻eŋ→ieŋ/錫韻ek→iek |

＊同様の韻母表は「韻母の音価表」（平山　昭和42：148）にもみられます。

＊（　）内の入声韻目と右端の開口（合口はのぞく）の等・韻目名と転写ローマ字は『音注韻鏡校本』（藤堂・小林　昭和46：該当頁）より。

　そこで曽摂蒸韻の主母音が二種であることについて、花登氏は次のように考えられました注34（花登　1974：4-5）。

「主母音の異なる韻が一つの韻に包括されるという現象は，切韻の組織上ほかに同様の例を見ない。蒸・職韻における主母音/e/の存在は，音声上は主母音そのものの前舌性よりは，むしろ声母の含むB類的特徴（音声上口蓋化しない）の上にあらわれていた。それで，主母音の異なる諸韻母が，押韻上一つの韻にまとめられたのである。音声上のあらわれとしては，/e/は/ə/の実現とあまりかわらない中舌母音であったろう。（略）以上のことから，中古の曽・梗両摂の主母音においては，音韻論的には曽摂は/ə/・/e/という中舌・前舌の二種の主母音をもっていたとしても，音声的には両摂の対立は調音点の前後という対立が最も顕著なものであり，曽摂が中舌母音，梗摂が前舌母音をそれぞれ有していたことが理解されるのである。」

　そして花登氏は曽摂の主母音əと梗摂の庚二（陌）の主母音eの関係を次のように考えられました（同書：6）。

「以上，梗・曽両摂の韻母の性質に二種の対立のあることを述べてきた。これを整理すると，（一）主母音については，音声的には梗摂の主母音は前舌母音，曽摂のは中舌母音である。曽摂の主母音が中舌母音で安定している（環境によって種々の変音をもち得るが，しかもその中舌性を失なわない）のに比べて，梗摂はその安定性を少しく欠く。（二）韻母の型については，梗摂が強弱型であるのに対し，曽摂は弱強型である。」

＊韻母の型については注32参照。

　さて花登氏は上のような違いのある曽梗摂の韻尾にpalatalなを仮定すれば、宕・通摂の喉音韻尾ŋとの違いを、次のように説明できるとされました（同書：6）。

「私は以上の如き対立をもった曽・梗両摂にpalatalな韻尾を仮定した。硬口蓋音（palatal）は歯茎硬口蓋音（alveolo-palatal）から後部硬口蓋音（post-palatal）に至るまで，その調音点は非常に広い範囲にわたる。したがって，その置かれた環境によっては，音韻的に同じく/-/であっても，音声的には前舌的音特徴をもつものもあれば，中舌に近い音特徴をもつものもあったであろう。しかし，このは，あくまで硬口蓋音（palatal）であり，中古中国語においては，軟口蓋（velar）鼻音-ŋをもつ宕・通摂とは明確に区別され得たのである。」

　そして花登氏はベトナム漢字音にpalatalな喉音韻尾の反映を次のようにみられました（同書：7）。

「4・1　ベトナム漢字音の場合

　ベトナム漢字音原注では，曽摂はăŋ/ăk・wăŋ/wăk（登韻），ɯŋ/ɯk・ăŋ/ăk（蒸韻）のようにvelarな韻尾をもち，梗摂はaɲ/ac・waɲ/wac（庚二及び耕韻），iɲ/ic・wiɲ/wic（庚三・清及び青韻）のようにpalatalな韻尾をもつ。（略）この中古中国語曽摂の主母音の中舌性こそが，曽摂のpalatalな喉音韻尾-を，梗摂諸韻の-ほどにはpalatalに感じさせなかったのである。というのは，はpalatalという点でvelarの-ŋと区別されるのであるが，既述の如くの調音域自身がかなり広い。（略）そこで，外国人たるベトナム人は，その曽摂韻尾-をよりvelarに近い-ŋと聴取したのである。  
　一方梗摂字の場合は，その主母音が元来前舌母音であって，その韻尾のpalatalな性質を抑制するどころか，逆にpalatalな性質を推進する方向に働いたのである。つまり，梗摂の場合には、主母音のもつ前舌性のゆえに調音点の前移が見られ，その調音点の前移と，韻尾のpalatalな性質との相乗効果により，舌面と硬口蓋は接触しやすくなる。その聴覚印象（acoustic image）をベトナム人は-ɲととらえたのであろう。

　この曽・梗摂主母音と韻尾-によって作り出される聴覚印象は，宕摂・通摂などのvelarな韻尾をもつ韻のそれとは明確に区別された。しかし，朝鮮漢字音などの域外訳音，あるいは現代中国語諸方言などにおける曽・梗摂のあらわれ方を見ると，かなり微妙な点をもっていたようで，その前にくる声母や介母の影響でさまざまなあらわれ方をしている。（略）」

　次に朝鮮漢字音の場合をみてみると次のようになっています（同書：8）。

「4・2　朝鮮漢字音の場合

　朝鮮漢字音原注では，中古の梗摂の字は，開口ɐiŋ/ɐik，合口oiŋ/oikの形であらわれるものが多い。特に二等韻の庚韻・耕韻において，この傾向は顕著である。一方曽摂では，一等開口ɯŋ/ɯk，合口uŋ/uk・oŋ/ok，三等開口A類iŋ/ik，同じくB類ɯŋ・ɯk，合口はB類のみでyəkがそれぞれ主流の形である。

　しかし曽摂にも全体に占める割合は大きいとはいえないものの，開口一等にはmɐiŋ㡟懜，hɐik劾，sɐik塞があり，同じく合口にはkoiŋ肱■厷，hoiŋ弘■があり，三等開口B類には，c‘ɐik昃，sɐik色嗇穡濇などの形が存在する。（略）」  
　＊■は革偏に厷の字の代用。

　そこで花登氏は中古梗摂と曽摂の喉音韻尾の違いを次のように考えられました（同書：9）。

「（略）私は，それはやはり4-1で述べたベトナム漢字音の場合と同じく，曽摂の中舌的な主母音のために，palatalな-ŋ（つまり-）が，前舌的主母音をもつ梗摂の場合ほどpalatalには感じられなかったためである，と解釈する。ベトナム漢字音において，-ɲとなってあらわれる中古の-韻尾は，そういう音韻をもたない朝鮮漢字音では，主母音と韻尾の間の狭いわたり音（glide）-iとして理解されたのである。（略）」

＊下線は筆者。下線の記述は橋本氏の梗摂韻尾についての考え（第6節17頁の下線）参照。

　さらに福州方言にたいする花登氏の考えを次にみてみます（同書：9-10）。

「4-3　福州方言の場合

　福州方言原注で注目すべきことは，喉音韻尾をもつ曽・梗・宕・通の四摂が二重母音の形となってあらわれることである。つまり曽・梗両摂はɛiŋ・aiŋ・iŋ，宕・通両摂はouŋ・ɔuŋなどとなっている。（中略）福州音では，曽摂字にも母音と韻尾の間にわたり音-i-を生じた。əによって，その過程を見てみると，ə＞əiŋ＞aiŋ・ɛiŋの如きものではなかったかと考えられる。（略）さらに派生したわたり音-i-のhighかつfrontな性質は，主母音の前舌化を引き起こし，最終的にはaiŋ・ɛiŋの形になったのである。  
　朝鮮漢字音の場合と異なり、曽摂字の大部分がɛiŋ・aiŋの形をとることは，注目に値する。思うに，福州方言においては，二種の喉音韻尾の調音点の前と後，つまり曽・梗摂の-と宕・通摂の-ŋの対立こそが重要とされたのである。宕・通のouŋ・ɔuŋの-uŋによってその奥よりであることを，曽・梗摂のɛiŋ・aiŋの-iŋによって，その前寄りであることを区別したのであろう。」

＊宕通摂の韻尾が福州方言でouŋ・ɔuŋとなっていることにたいしての平山氏の考えとその平山氏にたいする尾崎氏の批判は注35。

　また天台漢音（新漢音）をみると次のようになっています（佐藤　昭和48：66）。

「天台漢音では曽摂入声字に限って一風変った読み方をするものがある。例時作法・法華懺法中の「色」「即」セキ「国」クヱキ・ケキ「或」「惑」クヱキがそれである。（略）これを梗摂所属の「赤」「釈」セキ「亦」ユキ「歷」レキ「逆」ゲキ等と比べると、共にエキ型で読まれて同じ扱いであることが判る。（略）その（筆者補：中国北方のある）方言では恐らく曽摂の字（少くともその一部）は入声において梗摂と合流していて梗摂と同じに発音されていたものと思われる。」  
　＊「色」：「シキ・ソク・ショク」（藤堂編　昭和53：1087）。

　この天台漢音にあらわれる梗摂の特徴は次のように考えられるでしょう（有坂　昭和32：324）。

「唐末宋初頃の北支那音に於て、梗攝韻尾のng,k（g）は、かなりpalatalな性質を持つてゐたものと見える、（安南音は、今も此の特色をよく保存してゐる。）天台漢音では、（略）白をハイと讀む（筆者補：「白」は陌韻bɛk）場合のイは、中心母音と韻尾k（g）との間のglideがiの如く響いたものであらう。朝鮮音では、梗攝韻の母音がăやoである場合には、それらと韻尾ng,kとの間に、必ずiが挿入されてゐる。例へば萌măing更kăing白păik（略）の如し。（略）」

　そして佐藤氏がみづから作成された「五種漢蔵対音韻母比較表（曽摂・梗摂）」（佐藤　昭和48：65）をもとに、佐藤氏は曽梗摂韻尾の非入声字と入声字との変化の違いを次のようにみられました（同書：64）。

「このように、平上去声では曽・梗摂は（筆者補：主母音i・eによって明瞭に）区別されて混ずる気配は感じられない。（略）入声では全く同じ扱いをされて（筆者注：梗摂は曽摂と同じig/yig形が主流）いるわけである。」

＊他の域外訳音資料については注36。

　さらに湖北方言に属する武昌方言にも次のような違いがみられます（花登　1974：8）。

「-ŋ＝開口一・二等唇音の一部及び合口の一部

-n＝上記以外のもの  
　これは次のように理解される。これらの地点では，中古中国語でpalatalな喉音韻尾をもっていた曽・梗両摂は，その韻尾の口蓋性のために舌面と硬口蓋の間が狭くなり，舌尖と上歯茎の接触がみられ，中古の-は-nの形であらわれたのである。しかし，舌尖と上歯茎の接触を妨げる要素が音節の前にくると，韻尾は-ŋとなった。（以下、略）」

＊梗摂の「硬」（敬韻2等）は「今韵ən」注37（趙元任等　民国61：64）。

　このように中古喉音韻尾をɲと考える橋本説によって、「その主母音と韻尾-によって作り出される，かなり微妙な聴覚印象」（花登　1974：10）が様々な形で中国語諸方言や域外訳音にあらわれていると説明することができるでしょう。

　ここで上古に2種の喉音韻尾（Ⅰ類ɴwとⅡ類ŋ）を推定された頼説から上古Ⅱ類の後裔である中古のをɲと推定された橋本説にいたる学史的な流れを次に簡単にみておきます。

1. 中古深咸摂（m）、山臻摂（n）に比べて喉音韻尾ŋは通江宕梗曽摂と不自然に多いことから、頼氏は上古喉音韻尾にⅠ類（ɴw：中古で通江宕摂となる）とⅡ類（ŋ：中古で梗曽摂となる）の2種の存在を考えられました。そしてそのⅠ類のɴw（合口的な喉音韻尾）は唇音化された軟口蓋音の-ɡw,-kw,-ŋw、あるいは口蓋垂音の-ɢ,-q,-ɴ、またⅡ類のŋは通常の軟口蓋音の-ɡ（筆者注:g）,-k,-ŋであると推定されました（頼　1989：156）。
2. 頼氏は現代西南方言の梗摂喉音韻尾がnであらわれることから、中古の喉音韻尾にも2種のŋとを考えられました。そして北京方言では上古Ⅱ類の喉音韻尾の変化がŋ→→ŋとなると考えて、「ジグザグの變化こそ，眞の變化であると思われる」（同書：227）とされました。しかし頼氏はその中古喉音韻尾の実体についてはそれ以上追及されず、未解決の問題として残されました。
3. その後、頼氏は現代ベトナム語の語末にŋ/ŋmの対立があるとの三根谷氏の考え（三根谷　1993：73）をうけ、不明とされていた上古Ⅰ類（-ɡw,-kw,-ŋw、あるいは-ɢ,-q, -ɴ）は「-ṷɢ,-ṷq,-ṷɴ」（頼　1989：158）であると修正されました。
4. 18世紀に北京方言に起こった「家」（ka→tɕia）の「口蓋化」（藤堂　昭和62：167-171）から唐代にも同様の口蓋化が起ったと、河野氏が「「第一口蓋音化」学説を提唱」（古屋　2010：19）されました。そして橋本氏はそれをうけ、頼氏が未解決とされた中古梗摂喉音韻尾を有声硬口蓋鼻音ɲ（/ɲ/）である（橋本　1974：58）として、中国語西南方言の梗摂喉音韻尾の変化をɲ→nとされました。
5. また橋本氏の中古喉音韻尾をɲとみる考えを援用して、佐藤・花登氏は梗曽摂喉音韻尾の合流やベトナム漢字音・朝鮮漢字音、また外国借音（新漢音・漢蔵対音などの域外訳音）、さらには現代中国語の福州・武昌方言などへの変化を説明されました。  
   　＊河野氏の第一口蓋音化説については注38。
6. 中古梗摂韻尾は口蓋化したɲだったのか

　前節では中古喉音韻尾をɲとみる橋本説によって梗摂喉音韻尾の変化をŋ（上古Ⅱ類）→ɲ（頼説は）→n（西南方言）/ŋ（北京方言）/ɛiŋ・aiŋ・iŋ（福州方言）/ɲ（現代ベトナム語)などと説明できることがわかりました。しかしここまで橋本・佐藤・花登氏の論文を長々と引用してきたのは中古喉音韻尾がɲであったという橋本氏の考えのすばらしさをしめすためではありません。なぜならここまで梗摂喉音韻尾の変化をさぐるなかで、筆者は橋本氏のアイディアには疑念があると感じたからです。そこでその疑念をこれから書いてみたいと思います。

　橋本氏が考えられた中古ɲ（有声硬口蓋鼻音/ɲ/）の残存は現代中国語のどの方言にも報告されていないようです注39。すると、この中古ɲは中国語各方言でnやŋ、また2重母音などに変化して中国内の諸方言からまったく消えさってしまったと考えられます。そして中古中国語のɲは中国からみて辺境であるベトナムの漢字音に残存したとみられます。しかし中国語はベトナム語とは比べようもなく多くの話者をもつ言語です。そうであるなら中国内のどこかの方言に硬口蓋鼻音ɲが残存していて不思議はないと思われますが、現在の中国語諸方言にɲはみられません。そこで筆者にはなぜという疑問が起こるのですが、これをささいな疑問として無視してよいのでしょうか。また頼氏は中古梗摂喉音韻尾を（橋本氏はɲ）とみられたので、北京方言ではŋ（上古Ⅱ類）→（中古：橋本説ɲ）→ŋ（現在）と「變化が行きつ戾りつ」（頼　1989：226）したと考えられます。そこで頼氏は「ジグザグの變化こそ、眞の變化であると思われる」（同書：227）とみられましたが、北京方言の梗摂喉音韻尾は本当にŋ→（ɲ）→ŋのように変化したのでしょうか。ここにも疑問がおこります。

　ところでベトナム漢字音は「中國語における＜輕脣音化＞の完了した状態を反映している」注40（三根谷　1993：383）とみられています。そこで「中古（筆者補：中国語）に/f/類（筆者注：軽唇音）はまだ存在しなかったのであるから（略）」（藤堂　1980：194）、ベトナム漢字音は軽唇音化が完了した中国語を移入したのではないでしょうか注41。また「切韻」（筆者注：切韻序601年）時代には、「この両類（筆者注：曽梗摂）は性格の全く相反する主母音を有して相対峙して」（佐藤　昭和48：67）いたとみられ、7世紀はじめの頃の曽梗摂はまだ合流していなかったとみられます。そして佐藤氏は「主母音と韻尾の間にon-glideとして拗音iを生じ韻尾の口蓋化を引き起こした。」（同書：67；橋本説のɲ参照）ことで、梗摂入声の主母音が曽摂に合流したとみられました（同書：72）。また花登氏は「一方梗摂字の場合は，（略）逆にpalatalな性質を推進する方向に働いた（略）その聴覚印象をベトナム人は-ɲととらえた」（花登　1974：7）とみられました。そこで梗摂がpalatalな性質を推進する方向に働いたことで、ベトナム漢字音の梗摂喉音韻尾がɲになった（ɲに聞きなされた）のであれば、曽梗摂合流以前の7世紀初頭の梗摂喉音韻尾はɲではなかったと考えられるのではないでしょうか。

　このように橋本氏が中古中国語の梗摂喉音韻尾をɲとされた考えには疑問がわきます。そして特に橋本氏の論文で気になったことは中古中国語の「中古」の時代が7世紀はじめ（切韻時代）ではないとみられる点です。橋本氏は朝鮮漢字音を引き合いにだされ考察を進められていて、そこで考察されている「中古」は朝鮮漢字音の借入時期ころとみられます。たとえば橋本氏が唐・宋代もすでに過ぎ去った1447年刊の「龍飛御天歌」をわざわざあげておられることからもその「中古」は切韻時代の「中古」ではないとみられるでしょう。また佐藤・花登両氏が考察された曽梗摂合流の時期とされた中古も初唐はじめではなく中唐（以後）とみられます。そこで「中古中国語」を切韻時代の7世紀初めの中国語とすれば、中古梗摂喉音韻尾がɲであったとする橋本説には疑問が生じてくるでしょう。

具体的な論証もなく憶測で書いているといわれそうです。しかし先に中古の梗摂喉音韻尾ɲの残存が現代ベトナム語にみられるのに、中国語の諸方言にそれがみられないのはなぜかという疑問をだしておきました。その疑問は橋本氏が中古梗摂喉音韻尾をɲとみられたその「中古」が初唐ではないために引き起こされていると考えられます。そこで橋本氏の考えられた中唐（以後）の「中古」ではなく、本来、切韻が基準とされている7世紀初めの初唐時代を「中古」とします。すると頼説の中古梗摂喉音韻尾をɲとみる必要はなくなるので、中古梗摂喉音韻尾をある不明のXと考えます。そして中古梗摂喉音韻尾Xは現在までɲに変化したことがなく、それゆえに中国語諸方言にはɲはみられないのだと考えれば、中国語諸方言にɲが存在しないのはなぜかという疑問は解消されるでしょう。

　この筆者の考えは次のように示すことができます。

　　　　　　中古　　　　　現代

　中国語　　：X（＝）┬--→n（西南方言）/ŋ（北京方言）/ɛiŋ（福州方言）など

　ベトナム語：　　　　└--→ɲ

＊は頼説。Xをɲとみるのは橋本説。上古についてはここでは考えません。

　しかし中古梗摂喉音韻尾をɲ ではなくXであったと考えると、そのXは何だったのかという疑問がでてきます。しかし今回は橋本説への疑念とその疑念を解消するための考え方（上の変化式）を述べるにとどめます。

1. おわりに

　更新がいつも1年近くになっていて大いに問題です。そこで今回は前回の更新（～/Japanese/japanese2hp.docx：2022.2.25；「「」の表記を考える（補訂版）」）の第13節の最後の「お断り」に書いた第16～20節を考察しました。

　次回は前々回の暫定版を補訂するあいだに読んだ「日本書紀α群原音依拠説」（『古代の音韻と日本書紀の成立』の内篇第二章：1991年刊）の提唱者である森博達氏と平山氏とのあいだの『国語学』誌上（126,128,131,134集：1981～3年）に行われた論争を取りあげたいと思います。またこの論争について書いていた昨年11月に馬之濤氏の博士論文「明代中国史料による室町時代の音韻についての研究―『日本国考略』を中心に―」を読みました。そこで興味がわき、それから今年2月まで「寄語略」の解読を続けていました。しかしこれでは本来の「「」の表記を考える―続き」（今回の更新で、「中古喉音韻尾を考える」と改題）が書けなくなると考え、3月にはその解読を中止することにしました。そこで次回は「森・平山氏との論争について」を更新し、それがおわればその次に「「寄語略」の解読ー私案」（一部のみで未完）を更新したいと思います。

　中途半端になった考察が多くなってしまい筆者自身整理がつかない状態になっています。そこで上の二回の更新がおわれば「促音の問題」（前回の更新「「」の表記を考える」と関係）を離れ、中国語鼻音韻尾（陽類）と関係する「撥音の問題」に戻ろうと思います。その考察がおわれば促音と撥音の変化を融合させ、その変化のなかに促音と撥音を位置づけていきたいと思っています。  
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2022.9.13

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　ichhan

【注】

1. 「本邦の漢字音のうち、その喉内入声韻尾を「キ」とする一類がある。漢音の方では、韻鏡の麦韻昔韻錫韻、すなはち梗摂に属するものの中に、これをみとめる。たとへば、「碧」を「ヘキ」とし、「石」を「セキ」とし、「歴」を「レキ」とするがごとき、それである。これに対して、呉音の方では、曾摂の徳韻職韻に属するものの中に、これをみとめる。たとへば、リキ（力）シキ（式、色、識）ジキ（食）ヂキ（直）などである。これらは、字音の日本化に際して、韻腹の母音が韻尾の音色にその影響を及ぼしたものと解せられる。」（亀井　昭和59：126）。
2. 「九条家本法華経音」の音分類は「本鼻声　末鼻声（以上二項は推定）　本口声　半口声　末口声　舌内　舌前半内　本脣内　半脣内　末脣内　本喉内　末喉内　本歯内　半歯内　末歯内　遍外声　不遍外声　遍口声　単字　半音普字　津字　久字　智字　記字（改行）のようなもので、切韻系の二百六韻などとも異なり、前例を見ない分類である。その本文は、たとえば、（改行） 丘去不反　俱句爾反　復歩久反　有阿救反　優受九反　楼漏九反（改行）のごとくであって、この反切も、全く独特である。この音義の撰者は、天台宗の学侶、唯心房明覚（一〇五六～一一二二）ではないかと推測される。」（築島　1972：47）。＊反切例の声点などは省略。
3. 日本語における「「反切」は古く「反音」「仮名反」と呼ばれた。反切の上字と下字とを日本語の仮名で表わし、その仮名を通じて求める漢字の音を得ることである。その方法を説いたものに、寛治七年（筆者注：1093年）に明覚（筆者注：唯心房、「悉曇要訣」などの著者）の作った「反音作法」がある。」（上書：76）。

＊「**真聞集**　高山寺蔵本「」は、明恵の説をその弟子隆弁が記し止めたもので、安貞二年（一二二八）記録の奥書がある。その中に、（改行）半音者二字ノ中ニ下ノ字ノ入声ノ音ヲ上ノ字ニヨミツクルナリ、●（筆者注：●は梵字）ト云カ如キナリ云々（改行）のような記事がある。この「半音」は、「九条本法華経音」に、字音の末に普字・津字・久字・智字・記字を有するもの、すなわち入声音を「半音」と称していたものとおそらく同一の概念であって、多分明覚流の音韻学の伝承と考えられる。」（同書：113）。

1. 「観智院本類聚抄原注10）」の「禾音」においても、舌内入声音にたいするチ・ツのかきわけは次のとおり（同書：165）。

「　　　　　　　　　窟　　出　　仏　崛　屈　　…忽　　■　　咄　　卒　律（略）

法華経音　　　　　　　　　　津字　　　　　　　　　　　　智字

観智院本「禾音」　クツ　主ツ　部ツ　クツ　　…コツ　コチ　タチ　ソチ　リチ（略）（声点をはぶく）」

＊下線は︸記号の代用。■は乞（左側）に大貝（の名）の字。

1. 「（略）つぎには、便宜上―チに表記される比率のたかいものから順にかかげる（表は一部のみ）。

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 文献名 | －チ | －ツ | 百分率 |
| ① | 金剛三昧院蔵妙法蓮華経篇立音義（天福元年＜一二三三＞序） | 49 | 2 | 96.1 |
| ② | 九条家本法華経音（字音分類音義、平安時代末期写？） | 92 | 5 | 94.8 |
| ⑦ | 法華経単字（巻音義、保延二年＜一一三六＞写、略） | 47 | 18 | 72.3 |
| ⑨ | 宝寿院蔵法華経音義（篇立音義、応永三十三年＜一四二六＞写） | 66 | 30 | 68.8 |
| ⑬ | 法華経文字声韻音訓篇（快倫撰、慶長十八年＜一六一三＞成立） | 51 | 50 | 50.5 |
| ⑭ | 東京大学国語研究室蔵法華経音義（篇立音義、江戸時代写？） | 50 | 56 | 47.2 |
|  | 法華経音義（篇立音義、承応二年＜一六五三＞刊記） | 25 | 79 | 24.0 |
|  | 西来寺蔵法華篇音義（篇立音義、長祿四年＜一四六〇＞奥書） | 1 | 88 | 1.1 |

（略）この意味で、みぎ（筆者注：上）の表は、―チから―ツへの変移の過程を反映するものである。（中略）このような事例をおもんずれば、各音義ないしその祖本の成立年代の推定にあたって、舌内入声音の表記が有効な内部的徽証のひとつになりうる可能性も決して軽視できない。（略）」（林　1980：62-3）。

1. 「1.＜草稿本教行信証の舌内入声符＞親鸞（筆者注：1173－1261）は（略）入声の中を緩・急二類に分けている。（略）草稿本教行信証で、（略）「緩」（筆者注：ユル）が母音を伴う音を示したのに対して、「急」（筆者注：キフ）とは原音[t]のみの発音を意味したようである。（略）尚、親鸞はこの舌内入声を仮名で表わすには、直前の音節がウ列音の場合は「ツ」、その他の際には皆「チ」を借用して、「」「」「」とする原則を用いた。」（小林　昭和44：60）。
2. 「安原貞室『かたこと』にいう「二四はちづめ」（巻三）も，この舌内入声音の発音と先行音節の母音との関係を述べたものである原注16。かけ算の九九をたくみによみこんだこの文句は、相通説の二すなわちイ段の音節と、四すなわちエ段の音節につづくばあいはには「ち」をつめて――短促的に――発音すべきことを指示したものであり、たとえば文献⑩⑪⑬⑯(表9)などにしめされる状態を根拠とするのであろう。」（林　1980：65）。

＊『かたこと』には「155　一を　〇ふんべち（改行）156　一を　〇しちねん（改行）右（筆者注：左）二つはしからぬ歟。はちといふこと侍る。それもことによりて。聞あしきはふべしと云り」（白木　昭和51：53）とみえます。

1. 「ところで入声韻尾の開音節化は、短促性の消失と同時に、先行母音の支配からの独立を意味する。舌内入声音における初期的な調和は、韻尾の独立の過程においてなお先行母音の影響をうけながら、徐々に均衡をくずし、最終的には先行母音との調和を放棄することによって、音韻的区別はその実質的意味をうしなったとかんがえられる。」（林　1980：66）。
2. 別表3（林　1974：167）は以下の徳職韻をのぞき省略。

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 韻鏡 | | 内42開 | | | |
| Ⅰ | Ⅱ | Ⅲ | Ⅳ |
| 広韻韻目 | | 徳 | 職 | | |
| 法華経音標目 | 記字 | 0 | 2 | 9 | 0 |
| 久字 | 17 | 1 | 6 | 2 |

1. 「一方，先行母音に/i/をもつもののうち，職韻Ⅱ・Ⅲ以外の諸字で法華経単字・東大本・天福本においてクの表記がとられるものは，次の14字であるが，

（広韻韻目）　（法華経単字）　（東大本）　　（天福本）

肉 屋Ⅲ（通摂） ニク 　　　　ニク 　　－

辱 燭Ⅲ（″） ニク 　　　　ニク 　　－（以下、略）

育 屋Ⅳ（″） イク 　　　　イク 　　イク（以下、略）

いずれも通摂の諸字で，職韻は含まれないから，上記の事実に反しない。」（林　1974：168-9）。

1. 中国中古音と朝鮮漢字音との対応は次のとおり（河野　1968：134）。

|  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 韻攝 | | 平・上・去 | | 入 | |
| 陽韻 | A | B | 中古音 | 朝鮮音 | 中古音 | 朝鮮音 |
| 山 | 臻 | -n | ㄴ -n | -t | ㄹ -r |
| 咸 | 深 | -m | ㅁ -m | -p | ㅂ -p |
| 梗 | 曽 | -ng′ | ㆁ -ng | -k′ | ㄱ -k |
| 宕・江 | 通 | -ng | ㆁ -ng | -k | ㄱ -k |
| 陰韻 | 果・假 | 遇 | -φ | － |  |  |
| 蟹 | 止 | -i | ㅣ -i |
| 効 | 流 | -u | （ㅗ/ㅜ）（-o/-u） |

＊「十六韻摂との対応では，江摂・假摂はそれぞれ宕摂・果摂と合体している。」（花登　1974：18）。

1. 『西大寺本金光明最勝王經古點の國語學的研究　研究篇』には「但しk入聲の中に（改行）八六　ノ一〇（改行）といふ形があつて、これのみキになつてゐる。元來k入聲がクとなつてu母音を取るのは、恐らく體母音iにひかれたものであらう。この種類の音は、曾摂職韻の二・三等に屬するもの、體母音のイであるものに限る。この古點には識字より他の例が見えないが、それらの文字は早く尾子音がキになつていたのかもしれない。これらの事は呉音の上に於ていふことであつて、漢音についてはまた別である。」（春日　昭和60：研究篇62）。
2. 「（ⅰ）従来指摘されきたったところではあるが，呉音における入声音はフ・ツ・  
   　　ク・チ・キのかなにうつされる。

　　　　-p…フ（改行）-t…チ・ツ（改行）-k…キ・ク

(ⅱ)唇内入声音にかきわけのないことは，小松氏の指摘のように，その唇音性から説明される。

（ⅲ）舌内・喉内入声音については，チ・クのかなにうつされるのが原則的であり，これは

-t……i（まえより）

-k……u（おくより）　ただし，ともにせまい母音

　　のごとく理解される。

（ⅳ）舌内・喉内入声音のかきわけの基準は，日本字音にうつされたその先行母音が主要な条件となる。

（1）舌内入声音では，先行母音/u/のばあいのみツにうつされる。

（2）喉内入声音では，先行母音/i/のばあいのみキにうつされることがある。

　　　（以下、本文のⅤにつづく。）」（林　1974：172-3）。

1. 「中国の音韻学では伝統的に中国語の音節をIとMVF/Tとに二分し，Iを声又は音，MVF/Tを韻」（河野　1968：47）といいます。そのF（韻尾）をさらに「GE（Gは渡り音，Eは音節末音）とし，全體をIMVGE/Tと記すこととする。」（頼　1989：173）。

　　　＊I：頭子音。M：介音。V：主母音。T：声調。

1. 「まずⅠ類では開口・合口の對立がないのに對して（原注1），Ⅱ類にはその對立がある。（略）また中古の2等韻はⅠ類において重韻のないもの（肴・覺・江）が現われるのに對して，Ⅱ類においては重韻のあるもの（佳皆麻・麥陌・耕庚）が現われる。また陰類（即ち陰尾韻。中古で韻尾が母音かゼロの韻母）について，Ⅰ類は殆どuであるのに對してⅡ類は主としてiである。また陽類について，Ⅰ類は原則として韻書の先頭にある韻（東冬鐘江）であるのに對し，Ⅱ類は原則として韻書の中間にある韻（陽唐庚耕淸靑蒸登）である。（略）」（頼　1989：156）。
2. 「もちろんこのような順（筆者注：-ɡw,-kw,-ŋw）に書いたからといって，-g,-k,-ŋを發音したあとにwを發音するというわけでなく，むしろ實際はwの口の構えのままで舌根を動かし，そこで-ɡ,-k,-ŋを發音した音を表わすつもりであったが，その音を分析して-ɡw,-kw,-ŋwとすることは不自然であって，むしろこれは-wɡ,-wk,-wŋとすべきであった。しかし更に音聲的に忠實にはwをuと書きかえて-uɡ,-uk,-uŋとすべきであろうし、更に考えれば，uに續く喉音としては口蓋垂音をこれに當ててもよいであろう。かくしてⅠ類の韻尾は-uɢ,-uq,-uɴと一應考えられる（原注5）。（略）」（頼　1989：157-8）。
3. 旧説（前説）と新説（修正説）の間の事情：「しかしその（筆者補：旧説の）解決については遂に名案なく，空しく4年を過した。ところがこのごろ，三根谷徹氏の學説（原注3）（原補1）によって啓發される點があり，再び論ずることを得た次第である。」（頼　1989：156-7）。
4. 上（注17）の三根谷氏の学説：「ヴェトナム語においては北部のハノイ方言にも南部のサイゴン方言にも[-] [-]という二重調音子音が音節末に（韻尾として）現われる。（略）しかるに，南部方言においてはその差異が音韻論的に有意味のものとして/-ŋ/に対する/-/という音素をたてなければならない。（略）」（三根谷　1993：72）。
5. 三根谷氏は「筆者としては頼氏の旧説のうち[-][-]）というのに従いたいと思うが，更に[-][-]のような二重調音子音さえ考えてみたいと思う。」（三根谷　1993：72）と、頼氏の新説（-ṷɢ,-ṷq,-ṷɴ）ではなく、旧説（唇音化された軟口蓋音）を支持されています。
6. 「2．切韻の韻母の体系について，われわれが新しい解釋を提出することになったのは，-ŋ,-kを韻尾にとると推定された韻母の数が，-m,-p;-n,-tを韻尾とする韻母に比べて不均整に多いことに対する疑問が一つの出発点となったのであった。即ち，頼惟勤氏は上古音について-ŋ，-kと区別して-ɴw，-qwという韻母を推定し，その区別を中古音に於ても認めるべきだとしたのであり（原注12），それを受けた拙論（原注13）は，後に通摂と江摂に包含させられた諸韻の韻尾に円唇化されたŋを推定し，その円唇性と主母音の円唇性を併せた要素をたてて，東-ʌuŋ，-iʌuŋ 屋-ʌuk，-iʌuk；冬-ɑuŋ，沃-ɑuk；鐘-iɑuŋ，燭-iɑuk；江-auŋ，覚-aukとすることに一つの解決を見出したものであった。」（三根谷　1993：116-7）。

＊平山氏の「あとがき」には中国人研究者などの説との異同にも触れられています。また本文の要旨は平山　昭和42:153にもみられます。

1. 「（12）韻尾のmとnの區別は，元代の中原音韻には未だ保存されてゐるが，明末萬曆年聞ママの利瑪寶の文獻や天啓年間の西儒耳目資には既に無い。このmからnへの變化は，朝鮮の崔世珍の四聲通解（明の正德十二年）の記載に據れば，その時代の支那語には既に起つてゐたことが分る。」（有坂　1959：148）。
2. 本文引用の最後の「略」に続いて以下の文が続きます。  
   「上古の（筆者補：喉音韻尾Ⅰ類の）中・東部は-ɴwを持ち，上古の（筆者注：Ⅱ類の）耕・蒸・陽部は-ŋを持つと推定される。かくして，現代方言の比較からしても，また上古から見ても，中古の鼻音韻尾は，-m,-n,-ŋの3種ではなく，4種のものがあったと思われるのである。」（頼　1989：223）。
3. 「（3）高口蓋音（C、「硬口蓋音」というと、なんとなく「ソリ舌音」がわすれられてしまうので、より一般的ないいかたをもちいる）」（橋本　1981：217）。

＊高口蓋音については「第30図　4大子音類」（同書：218）参照。  
＊IPAの硬口蓋音については城生　1992：59。硬口蓋化については神山　2012：40-1。

1. 明清の交に「家　中古音ka（麻韻二等）＞kia＞kia＞tɕia（北京語）」（佐藤　昭和48：70）ような変化が起った口蓋化とそり舌音化が連動していたとみる藤堂氏の考え（藤堂　1980：400）にたいする、筆者の批判は「母音イとウの相関について考える」（～/japanese/japanese1hp.docx）の第28節「正歯音3等について」を参照。

＊「第一口蓋音化」（河野　1979：227-232）については注38。

1. 「（筆者補：原注）（13）例えば現代中国語の母音/a/は各種の介音や末音と最も自由に結合して現れるが，＊uau，＊üauのような組み合せは存在しない。「涯」，「崖」の発音yai/iai/も使う人が少くなって，今では大部分ya/ia/又はai/ai/と発音されるようになってしまった。」（橋本　1974：58）。
2. 本文の上略部分には、カールグレン（また有坂氏）以来の喉音韻尾ŋにたいする疑念、そしてその疑念を解決された頼氏の上古、また中古喉音韻尾を2類とみる考えにいたる学史的な流れの簡単な紹介（花登　1974：1-2）が書かれています。
3. 原注➇：「palatalな喉音韻尾という言い方は実はおかしい。小論では，従来喉音韻尾-ŋを持つとされてきた四摂の内，曽・梗摂のもつ硬口蓋鼻音韻尾を特にpalatalな喉音韻尾と称すことにしたい。以下同じ。」（花登　1974：18）。
4. 「中世語の母音調和は，次のように陽母音と陰母音とが対になすものであった。なお，母音/i/は母音調和の点では中立的である。

|  |  |
| --- | --- |
| 陽母音　ʌ　a　o | 中立母音　i |
| 陰母音　ɨ　e　u |

　　　（福井　2013：44）。

1. 『東国正韻』序文には、「韓国語では渓母（k‘h-ㅋ）音を多く用いているのに，字音においては「夬」字の一音のみである。これがもっとも笑うべきことである。」（姜　1993：200）。

＊「これが牙音に来ると更に徹底して清・次清も別無く皆ㄱk-で示される（略）」（河野　1968：本文114）。

＊「쾌（夬）/쾌（快）」（同書：資料音韻表Ⅱ-114,114）。「夬・快」：「kuăi（中古夬韻見母）/khuăi（中古夬韻渓母）」（藤堂・小林　昭和46：52,52）。

1. 中国語７大方言区の一つ、「北方方言は，その言語特色によっておよそ四つの下位方言区に分けることができる。（略）

（一）華北方言（改行）すなわち狭義の北方話で、北方官話ともいう。（略）

（二）西北方言（改行）西北各省（自治区）の漢人が聚居する地域に分布する。（略）

（三）西南方言（改行）「西南官話」ともいう。（略）

（四）江淮方言（改行）「下江官話」ともいう。（略）」（詹　昭和58:120-7）。

＊中国語７大方言区は「北方方言区・呉方言区・湘方言区・贛方言区・客家方言区・粤方言区・閩方言区」（同書：18）。

1. 「（1）唐詩押韻における曽摂梗摂押韻例（中略）この種の押韻例が平上去声ではあまり見られず、殆ど入声に集中して現れるのはきわめて顕著な事実である。（中略）李賀の詩には他のどの詩人と比べても曽梗押韻例が目立って多く出現する。（中略） とすれば、李賀詩、ひいては中晩唐の詩に活発に出現する曽・梗同用例もやはり緩い押韻と見るよりは、現実の発音に基礎を置いた押韻の例と見る方が自然であると思うのである。」（佐藤　昭和48：60-2）。

「（2）敦煌変文に見える曽・梗押韻例（中略）当「曽梗両摂混用」例が平上去声では稀有である反面、入声に特に多く集中して現れるという点では、変文と中晩唐詩（古体詩）とは興味ある一致を見せている。これは偶然の事とは考えられない。」（同書：62-4）。

＊（3）の漢蔵対音資料と（4）の天台漢音については第8節参照。

1. 「これ（筆者注：主母音と韻尾の関係）については既に趙元任氏らによって次の事實が指摘されている（原注31）。即ち：

　以上の各方言中，上海・南京には一つの重要な特點がある。即ちこれはカールグレン氏が氣づいていない點であるが，臻攝（深・梗攝も同じ）では，その韻尾が山攝（また咸・宕攝）の如くではないのである。つまり山（咸・宕）攝では韻尾が不完全な鼻音になるのであるが，臻（深・梗）攝では大へん強い完全な鼻子音となり，上海では-ŋであり，南京では-n，或は-ŋと讀まれる變値音位（variphone）なのである。このような特點は，臻（深・梗）攝の主母音が短くて韻尾が強いこと，ならびに山（咸・宕）攝の主母音が強くて韻尾が弱いことを證明するに足る好例である。

以上の記述を簡示すれば次のようになる原注32。

　　　　　主母音　　 韻尾

内＊轉　　 短,（弱）　強（長）

外＊轉 　（長）,強　　弱（短）」（頼　1989：246-7）。

1. 原注⑩：「宋初において韻尾-t -kが合流して-ʔに変じ、-pのみが独立していたらしいということについては小川環樹氏「蘇東坡古詩用韻考」（京都大学文学部五十周年記念論集所収　一九五六）及び周祖謨氏前掲論文参照。」（佐藤　昭和48：75）。

＊「蘇東坡古詩用韻考」には「周氏が「皇極經世圖聲音圖解」の章において推定したごとく、邵雍のころ即ち北宋初期において-t,k-ママの韻尾子音はもはや失われて、聲門閉鎖音ʔとなっていたと考える外はあるまい。つまり三内の韻尾の中で-pの子音のみがなお獨立して存在していたのである。」（小川　昭和52：134-5）とみえます。

＊周祖謨氏前掲論文：「宋代汴洛語音考」（『問學集』（下冊）　中華書局　2004。初刊は1966）。

＊邵雍：「皇極經世書聲音倡和圖」の著者（1011－1077生存）。

1. 佐藤氏も「（略）主母音ə・ɐの対立を二つの別々の母音音素の対立と見る必要は必ずしもなくなり、これらを音韻的に一個の/ə/に統一することは無理ではないと思われる。（略）」（佐藤　昭和48：72）とみられています。
2. 「（略）なお，現代諸方言で後者の韻尾（筆者注：上古Ⅰ類-uŋ,-uk）を有する韻母の例として福州方言（筆者注：南方方言の閩東方言）における-ouŋ.oukなど（藍亜秀「福州音系」国立台湾大学文史哲学報5，1953，pp.241～331など参照）の他，近ごろの報告では揚州方言（北方方言の江淮方言の一つ）における-ɔuŋ,iɔuŋ（北京大学中国語言文学系語言教研室編「漢語方音字滙」北京，1962，p.7参照）がある。」（平山　1966：16；両書とも未見）。」

＊上の平山氏の考えにたいして、尾崎氏は「（略）通攝江攝諸韻の韻尾として三根谷氏の措定した/-uŋ,-uk/を、「福州方言における-ouŋ,-ouk」、また「揚州方言における-ɔuŋ,iɔuŋ」などを（筆者補：平山氏が）（同上論文16頁）のに私が同調できないと感ずるのは、（中略）福州方言における-ouŋ等が、いずれの記錄者によっても音形態としてその存在を確認されているらしいのに、揚州方言における-ɔuŋ等は、記錄者によっては取り上げられないものとなるのは、そこでの-uŋが、その直前の母音の開口度が特に高い場合、-uŋとしてあらわれるに過ぎない入りわたり性のものであることを示すものと思われる。（略）」（尾崎　昭和55：133-5）と批判されています。

1. 「「敦煌毛詩音残巻」（筆者注：S.2729は7世紀後半、P.3383は8世紀前半写定）の反切は，曽・梗摂合流の萌芽状態をうつし出したものと考えられるのである。」（花登　1974：15）。そして「曽・梗両摂は，分韻上明確に区別されていたが，反切改良の結果として当時の口頭音の反映が見られ，そこでは曽・梗両摂の合流の萌芽と覚しきものが，反切上字という形式をとって「慧琳音義」（筆者注：「慧琳一切経音義」784年作成開始）にあらわれている，と解釈すべきものであろう。」（同書：16）。

　また「Brāhmī文字轉写『羅什譯金剛經』の漢字音」（筆者注：水谷　1994：83-117）において「曽梗両摂は平上去声で整然と分離されているのに、入声では混同される傾向が見られることである。梗摂所属の「白」「亦」（筆者注：陌韻2等・昔韻3等）に曽摂と同じ読み方（筆者注：尾字hi:条の例；「phehi: *phihi:*,yīhi:」（水谷　1994：(103),(106)より原引））をするものがあることは注目される。」（佐藤　昭和48：66）。

1. 『湖北方言調査報告』に「分地報告　一．武昌（城内）のE．同音字表」（趙元任等　民国61：57-65）にn韻尾がみられます。

＊武昌方言は北方方言である西南方言（西南官話）の四つの土語群の一つ、湖北話に属す（詹　昭和58：124）。

1. 「河野六郎は「第一口蓋音化」学説を提出、「もと牙喉音声母を持ち、介音が-i-で、口語層に属する語」という条件のもと牙喉音の系列が章組の系列に変わったと考えた。」（古屋　2010：19）。

＊「18）　明清交代期の頃、多くの北方方言ではki- khi- xi-がtɕi- tɕhi- ɕi-に変わる。河野学説によれば、これが第二口蓋音化である。」（同書：30）。

1. 泥母の「年」（先韻山摂：n(i)en）は西安（西北方言）や成都（西南方言）では「ȵ」（有声歯茎硬口蓋鼻音/ȵ/；詹　昭和58：128）、また「泥」（齊韻蟹摂：n(i)ei）は蘇州（呉方言）、長沙（湘方言）、南昌（贛方言）などでも「ȵ」（同書：149,162,177）で、それらの方言にはɲ（有声硬口蓋鼻音/ɲ/）はみられません。
2. 「非・敷・奉・微」の4字母は，明らかに五代（筆者注：907-960年）か北宋（筆者注：960-1127年）ごろの学者が，当時新たに成立した/f/類の音（筆者注：軽唇音）を表すために，付け加えたものである。」（藤堂　1980：194）。また「輕脣音化の現象は切韻（筆者注：601年成）系韻書の反切には見られない，それより後に起つた現象だからである。」（三根谷　1993：383）。

＊「ハ行音の変化を考えなおす」（～/haline/haline1hp.docx）参照。

1. 中国語平声の清・次清・濁・清濁（等韻学で全清・次清・全濁・次濁）声母字が普通話で「1/1/2/2」調（1は陰調、2は陽調）であるのにたいして、ベトナム漢字音では「1/1/2/1」（1は高調、2は低調；三根谷　1993：106）と清濁声母字が異例の対応をしています。

【以前の考察】

＊各節・注などに関係する以前のURL：

　http://ichhan.sakura.ne.jp/japanese/japanese1hp.docxをみてください。

【引用書など】

＊中国・韓国人名の一部は日本語読み。

＊複製本や再版本がある場合も初版の注記（書名・出版年・版次など）はほとんど省略してあります。

有坂秀世　昭和32　『国語音韻史の研究　増補新版』　三省堂出版

有坂秀世　1959　『音韻論　増補版』　三省堂

小川環樹　昭和52　『中国語學研究』（東洋学叢書）　創文社

尾崎雄二郎　昭和55　『中國語音韻史の研究』（東洋學叢書）　創文社

春日政治　昭和60（再復刊本）　『春日政治著作集　別巻』（西大寺本金光明最勝王經古點の國語學的研究）　勉誠社  
　＊初刊（「斯道文庫紀要第一」岩波書店　昭和17年）。復刊（勉誠社　昭和44年）。

孝夫　2012　『ロシア語音声概説』　研究社

亀井孝　昭和59　『亀井孝論文集3　日本語のすがたとこころ（一）音韻』　吉川弘文館

河野六郎　1979　「中国音韻史研究の一方向―第一口蓋音化に關聯して―」『河野六郎著作集　第2巻』　平凡社  
＊原載：『中国文化研究会会報』（第1期第1誌）　東京文理科大学　昭和25

河野六郎　1979　「朝鮮漢字音の研究」『河野六郎著作集　第2巻』　平凡社  
＊原載：「朝鮮漢字音の研究」『朝鮮学報』（Ⅰ～Ⅷ：31～33,35,41～44号）　朝鮮学会　昭和39.4/7/10,昭和40.5,昭和41.10,昭和42.1/5/7）。引用は『朝鮮漢字音の研究』（河野六郎発行　1968）より引用。

　1993　『ハングルの成立と歴史』　大修館書店

小林芳規　昭和44.12　「中世」『國文學　解釋と鑑賞』（第34巻14号）　至文堂

佐藤昭　昭和48.6　「中古中国語の曽摂梗摂合流の進行過程」『集刊東洋学』（内田道夫教授退官記念　中国文学特集号：29号)　 東北大学中国文史哲研究会

M.シュービゲル　1982（新版）　『新版音声学入門』　小泉保訳　大修館

佰太郎　1992（新装増訂3版）　『音声学』　アポロン

上代語辞典編修委員会編　1967　『時代別国語大辞典　上代編』　三省堂

白木進編著　昭和51　『かたこと』　笠間書院（笠間選書53）

伯慧　昭58　『現代漢語方言』　樋口靖訳　光生館

中国語学研究会編　昭和45（再版訂正：昭和44初版）　『中国語学新辞典』　光生館

訳注　2010　『訓民正音』　平凡社

趙元任等　民国61（重刊）　『湖北方言調査報告』　中央研究院歷史語言研究所員工福利委員會（重刊）　台聯國風出版社（台北）

陳彭年等（重修者）　民国80　『校正宋本廣韻附索引』　藝文印書館（校正・印刷）

築島裕　1972　「第一章　上古・中古」「第二章　中世」『国語学史』　古田東朔・築島著　東京大学出版会

藤堂明保・小林博　昭和46　『音注 韻鏡校本』　木耳社

藤堂明保編　昭和53　『学研　漢和大字典』　学習研究社

藤堂明保　1980　『中国語音韻論－その歴史的研究－』　光生館  
　＊江南書院1979年の改版本

藤堂明保　昭和62『藤堂明保中国語学論集』　同論集編集委員会編　汲古書院

＊1.「上古漢語の方言―特に周秦方言の特色について」（原載：『東方学論集』（1954.2）

＊2.「ki-とtsi-の混同は18世紀に始まる」（原載：『中国語学』（94号：1960.1）

外山映次　昭和47（6版：昭和57）　「第3章　近代の音韻」『講座国語史　第2巻　音韻史・文字史』　中田祝夫編　大修館書店

橋本萬太郎　1974　「朝鮮漢字音と中古中国語口蓋韻尾」『アジア・アフリカ言語文化研究』（7号）　東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

橋本萬太郎　1981　『現代博言学』　大修館書店

服部四郎　1951（旧版）『音声學』（岩波全書）　岩波書店  
＊1984年（新版：録音カセットテープ附属：未見。

花登正宏　1974.10　「中古中国語の喉音韻尾―とくに曽・梗摂の合流について―」『集刊東洋学』（32号)　 東北大学中国文史哲研究会

林史典　1974.12　「呉音のかな表記における舌内および喉内入声音のかきわけについて」『千葉大学教育学部研究紀要（第1部）』（23号）

林史典　1980.9　「呉音系字音における舌内入声音のかな表記について」　『国語学』（第122緝）　国語学会編　国語学会

平山久雄　1966.3　「敦煌毛詩音残巻反切の研究（上）」『北海道大學文學部紀要＝The anunualreports on cultural science,14 (3):1-1243』

平山久雄　昭和42　「Ⅱ　音韻論　3　中古漢語の音韻」　『中国文化叢書 １ 言語』　牛島徳次・香坂順一・藤堂明保編　大修館書店

平山久雄　1989　「あとがき」『中國音韻論集』（頼惟勤著作集Ⅰ）　汲古書院

福井玲　2013　『韓国語音韻史の探究』　三省堂

古屋昭弘　2010.11　「上古音研究と戦国楚簡の形声文字」『中国語学』（257号抜刷）　日本中国語学会

水谷眞成　1994　「Brāhmī文字轉写『羅什譯金剛經経』の漢字音」『中國語史研究―中國語學とインド學との接點―』　水谷眞成　三省堂  
　＊原載：『名古屋大學文學部十周年記念論集』（pp.749-774,昭和34年3月）

三根谷徹　1993　『中古漢語と越南漢字音』　汲古書院

頼惟勤　1989　『中國音韻論集』（頼惟勤著作集Ⅰ）　汲古書院